

# 近代日本における「元寇」の想起

安藤 駿佑

はじめに

第一章 明治期及び大正期における「元寇」の想起

第一節 明治期及び大正期における「元寇」論

第二節 明治期及び大正期における「元寇」運動

第三節 明治期及び大正期における「元寇」関連人物の評価と「神風」意識

第二章 昭和戦前期における「元寇」の想起

第一節 昭和戦前期における「元寇」論

第二節 昭和戦前期における「元寇」運動

第三節 昭和戦前期における「元寇」関連人物の評価と「神風」意識

第三章 大東亜戦争下における「元寇」の想起

第一節 大東亜戦争下における「元寇」論

第二節 大東亜戦争下における「元寇」運動

第三節 昭和戦前期における「元寇」関連人物の評価と「神風」意識

おわりに

## はじめに

本論文では、鎌倉時代の歴史的事象である「元寇」が、近代日本においてどのように想起され、活用されたのかを明らかにする。具体的には、時局即応の出版物やメディアにおける元寇についての言説（以下、「元寇」論と呼称）と、元寇に関する国民運動や文化、政府の対応など（以下、「元寇」運動と呼称）を考察する。また、元寇についての啓蒙書を量的に分析することによって、元寇に関連する人物への評価の変遷や、いわゆる「神風」に対する認識についても明らかにする。時期としては、元寇に関する国民運動が盛り上がる明治中期から、昭和期の大東亜戦争の終戦までを分析の対象とする。

従来、元寇という「史実」に関する研究は非常に多く存在するが、元寇が時局に対応してどのように論じられたかについての研究は極めて少ない。数少ない「元寇」論の研究として、主に江戸期から戦後にかけての元寇研究の推移を分析した川添昭二氏の著作がある<sup>1</sup>。また、太田弘毅氏の研究では、明治中後期の「元寇記念碑」建設運動の過程が詳らかにされている<sup>2</sup>。本論文では、こうした研究を踏まえつつ、近代日本が経験した時局との関係を重視しながら、元寇の歴史がいつ、どのように想起され、活用されたのかに注目して分析を行う。

<sup>1</sup> 川添昭二『蒙古襲来研究史論』（雄山閣出版、昭和 52 年）。

<sup>2</sup> 太田弘毅「湯地丈雄の元寇撃退再評価運動 護国精神高揚のための三著作」（松浦党研究連合会編『松浦党研究』第 20 号〈芸文堂、平成 9 年〉）などの一連の研究がある。また、史料の集積として、太田弘毅『元寇役の回顧 記念碑建設史料』（錦正社、平成 21 年）が便宜である。

なお、特記がない限り、国名や戦争の呼称は当時において用いられていたものを使用する。また、蒙古襲来の事実に関しては、近代日本において一般的に呼称された「元寇」の語を用いる。引用箇所については、歴史的仮名遣いをそのまま用い、旧字体は新字体に改めた。ただし、人名については、旧字体に統一した。

## 第一章 明治期及び大正期における「元寇」の想起

本章では、明治時代から大正時代にかけて元寇がどのように位置付けられたかについて、当時の言論や国民運動を分析することによって考察する。また、この時期の啓蒙書等における元寇に関連する人物の評価や「神風」に対する認識についても明らかにする。

### 第一節 明治期及び大正期における「元寇」論

本節では、明治期及び大正期における出版物やメディアに表れた「元寇」論の特徴を明らかにする。

まず、明治期の「元寇」論については、「軍事大国」との関係、具体的には、清国、次いでロシアとの関係から論じられることが大きな特徴となっている。それは、元寇において当時の日本が、領土や人口、軍事力などで優越する「元」<sup>3</sup>という強大な帝国と対峙した事実と重なるためだと考えられる。

明治期における「元寇」論を牽引したのは、湯地丈雄の「元寇記念碑」建設運動であった。彼の運動については次節で詳述するが、この運動も当時において「大国」と考えられた清国との緊張関係から生じたものであった。つまり、明治19年8月に発生した「長崎事件」が運動の契機となっている。長崎事件とは、清国北洋艦隊の水兵が長崎港において日本人に掠奪・暴行を加え、警官隊と衝突した事件である。当時、湯地は福岡警察署長の職にあり、事件の様子を詳細に見聞したという。湯地にとって、清国の脅威は、元寇における「元」と二重写しとなった。それは、清国が「元」と同じ「支那」という括りで捉えられるばかりでなく、北洋艦隊を擁した「軍事大国」と考えられたからであろう。また、朝鮮半島に対する影響力の行使も、「元」の領土拡大政策と重なったものと考えられる。そして、湯地は「元寇記念碑」の建設を目的としながら、元寇の歴史を通して清国やロシアの脅威を伝える啓蒙運動を開始するのであった。

明治27年7月に日清戦争が勃発すると、湯地の運動の成果により、多くの国民は元寇を連想したと言われている<sup>4</sup>。確かに、日清戦争中の議論には、戦争を元寇と比較して国民に覚悟を求めるものがある<sup>5</sup>。その中では、清国を「支那」として「元」と同視しながら、「今回の挙動こりづまに亦愚ならずや」と述べられており、元寇において日本に敗れたにもかかわらず、再び戦火を交えたことが非難されている。だが、元寇と日清戦争を比較して論ずるものは、実はそれほど多くない。これは、清国と「元」に共通点があるとはいえ、戦場が遠方であったことが原因と考えられる。やはり、元寇は敵軍が本土まで迫って戦闘が行われた歴史であって、戦争が身近に感じられない日清戦争中には、「元寇」

<sup>3</sup> 蒙古が「元」という国号を使用していなかった時期もあるものの、本論文では便宜上国名を「元」と統一し、蒙古からの使者を「元使」と表記する。また、「元」と高麗や南宋の混成軍についても便宜上「元軍」と表記する。

<sup>4</sup> 湯地丈雄『履歴一斑』（湯地丈雄、明治44年）。

<sup>5</sup> 金子佐治郎『国民の覚悟 日清交戦』（温故堂、明治27年）。

論はそこまで活発には行われなかったものと思われる。

明治 28 年 3 月、日清戦争は日本の勝利に終わったが、同年 4 月に遼東半島還付をめぐる三国干渉が行われ、国民の対露感情はきわめて悪化し、ロシアとの間に緊張状態が生まれた。この時期になるとロシアの脅威を元寇と比較する言論が活発に行われるようになるが、これはロシアと「元」の類似点の多さから生ずるものと考えられる。まず、ロシアは広大な領土を有し、「元」と同様にユーラシア大陸の東方に位置している。また、強大な陸軍とバルチック艦隊を擁する「軍事大国」であり、三国干渉後のロシアの動向や朝鮮半島をめぐる対立なども「元」の領土的な野心と重なっている。

歴史学者の三上参次は、「蒙古は今日の露西亜で、露西亜は過去の蒙古で、其の人の地を侵略し、人の国を併呑し、武威を以て大陸を征服せんとする有様は方法手段こそ違へ、先づ同一の遣り口である」と断じており、ロシアの南下政策が問題視されていることがわかる<sup>6</sup>。こうした比較の中で、日本政府のロシアに対する姿勢を、元寇当時の指導者である北條時宗の強硬外交と比較して、政府に開戦の決心を迫るものが見られるようになった<sup>7</sup>。議会においても、鈴木重遠（衆議院議員）が、ロシアとの間に「第二の元寇」が発生する可能性を述べている<sup>8</sup>。

明治 37 年 2 月、日露戦争が勃発すると、日清戦争時と同様に、国民は再び元寇を思い起こしたと言われる<sup>9</sup>。日露戦争中の言論空間には、国民に元寇のような長期戦に備えるよう覚悟を促すものや、時宗と比較することによって東郷平八郎（連合艦隊司令長官）の活躍を賞賛するものなどがあつた<sup>10</sup>。また、『東京朝日新聞』の社説には「元寇を殲したるは神風なり。露寇を殲したるは神技なり」と論じられており、「露寇」という表現が用いられるほど元寇との共通性が指摘されたのである<sup>11</sup>。

日露戦争も日清戦争と同じく、陸上の戦闘は遠方で行われたが、海戦においてはロシアのバルチック艦隊が元寇の勃発した北九州にほど近い対馬沖で沈められており、こうした類似点も「元寇」論に大きな影響を与えた可能性がある。日露戦争は元寇に重ねられることで、国民の危機意識を大いに高めたのであつた。

以上のように、明治期においては、清国やロシアなど「軍事大国」との緊張状態、戦争状態に対応して「元寇」論が展開された。

次に、大正期の「元寇」論について考察する。「元寇」論は大正時代に入ると明治時代に比べて著しく低調となる<sup>12</sup>。その理由としては、日清・日露戦争によって清国・ロシアという目前の「軍事大国」の脅威が消滅したことや、国民運動を牽引してきた湯地丈雄が死去したことなどが考えられる<sup>13</sup>。

大正期は、明治期のように広く国民を巻き込んだ「元寇」論は少なくなるものの、一部の論者によって、第一次世界大戦後の新たな脅威を喧伝する材料として元寇が用いられるようになる<sup>14</sup>。具体的

<sup>6</sup> 三上参次「蒙古征伐の大計画」（『東京朝日新聞』明治 36 年 7 月 31 日）。

<sup>7</sup> 「天声人語」（『大阪朝日新聞』明治 37 年 1 月 5 日）、「北條時宗従一位を贈らる（社説）」（『読売新聞』明治 37 年 5 月 18 日）、菅谷秋水『北條時宗』（如山堂、明治 42 年）。

<sup>8</sup> 「第十五回帝国議会衆議院元寇殉難者国祭ニ関スル建議案委員会会議録（筆記）」（明治 34 年 3 月 22 日）。

<sup>9</sup> 前掲、湯地丈雄『履歴一斑』。

<sup>10</sup> 前者について、「内外評論 日露交戦と蒙古襲来」（吉田静屋編『開戦始末世界の輿論』〈井上一書堂、明治 37 年〉）、三上参次「交戦に対する覚悟」（『戦時画報』第 1 巻第 5 号〈近事画報社、明治 37 年〉）。後者について、「東郷大将凱旋（社説）」（『東京朝日新聞』明治 38 年 10 月 22 日）など。

<sup>11</sup> 「殲滅子遺なし（社説）」（『東京朝日新聞』明治 38 年 6 月 1 日）。

<sup>12</sup> この時期は、元寇の研究に関してもリベラルな傾向が強まっているとされ、石墨研究などの実証的な研究が行われている（前掲、川添昭二『蒙古襲来研究史論』）。

<sup>13</sup> 大正 2 年の湯地の訃報、叙勲は報道され、死後は伝記が出版されている（仲村久慈『湯地丈雄』〈牧書房、昭和 18 年〉）。

<sup>14</sup> ちなみに、第一次世界大戦中の「元寇」論としては、ドイツの脅威を「元」に擬するものや軍備の充実

には、大戦後、欧州に代わって影響力を増しつつあったアメリカや、ロシア革命として現実化した社会主義思想への警戒が元寇を用いて訴えられ始めたのである。

第一に、アメリカを対象とする「元寇」論を紹介する。アメリカの軍事的優位の事実に加え、排日運動の続発や中国大陸における対立などから、国民の対米感情は以前よりも悪化していた<sup>15</sup>。この時期、「対米戦争」を想定する多くの著作が出版されているが、その多くが元寇を絡めて論じている<sup>16</sup>。その一方で、アメリカにより主導された軍縮に対して明確に反対する「元寇」論は見られなかった。確かに、アメリカとの関係、特に軍縮問題は元寇と並ぶ「国難」と考えられることもあったが<sup>17</sup>、多くの論者は国際情勢の現実を受け容れ、軍縮を前提としながらアメリカに対抗することを主張した。つまり、元寇において軍事力に圧倒的な差があったにもかかわらず勝利を得たことを強調することによって、国民の「精神」の重要性を説いたのである<sup>18</sup>。例えば、佐藤鋼次郎（陸軍中将）は、「〔元寇の——筆者注〕当時の国民は現今の我國民の如くに米国海軍の大拡張が完成したら〔中略〕と軍艦の隻数のみを数へて、迎も米国には敵しまいと、落胆する様な弱虫ではなかつた」との主張を展開している<sup>19</sup>。ここでアメリカは、地理的に「元」との共通点が多い清国やロシアとは異なるが、太平洋を隔てた「軍事大国」に成長し、軍縮という「外圧」を日本に加えていることが、「元寇」論の形成に関係しているのであろう。ただし、実際にアメリカとの間で戦争状態となっているわけではないので、こうした議論は、明治期のように盛り上がりせず、一方的な啓蒙という性格が強くなっている。

第二に、社会主義思想を対象とする「元寇」論を紹介する。第一次世界大戦中の大正6年にロシアで社会主義革命が発生しており、日本への影響が懸念されていた。しかし、社会主義には当然のことながら実体がなく、従来の「元寇」論のように「元」と対比されるべきものがなかった。この時点では、革命によって出現したソ連を明確に「元」になぞらえるものは見当たらず、単に外来的な「国難」の典型として元寇を持ち出しているものと見られる。具体的な主張としては、軍縮への対応策と同様の「精神主義」によっており、社会主義思想という「大正の元寇」に対して、「忠君愛国の精神」という「防塁」が必要であると論ずるものなどが見られた<sup>20</sup>。

この時期、元寇に関する文化としても、上述の議論を象徴する映画が制作されている。アメリカとの対立や社会主義思想の浸透など、当時の社会の底流にあった国民の漠然とした不安を象徴する作品とも言うべき、映画「国難」（護国活動写真育成会、大正9年）である。この映画は、「国民思想を統一し護国の精神を發揚する」という趣旨の下、多くの費用と日数が投じられて制作された<sup>21</sup>。内容としては、主として元寇の様子を描きながら、効果的に航空機による空襲や軍艦の航行の描写を挿入することによって、国民にアメリカの軍事力や軍縮政策への警戒を煽る意図があったと考えられる<sup>22</sup>。「時も時 折も折」という宣伝文句が表すように、この時期の「国難」を見事に暗示しており、全国

---

を説くものなどがある（上泉徳彌〈海軍中将〉『大日本主義』〈広文堂書店、大正7年〉、阿部眞一郎〈海軍中佐〉『海の囁き』〈嵩山房、大正6年〉）。

<sup>15</sup> 長谷川雄一編『大正期日本のアメリカ認識』（慶應義塾大学出版会、平成13年）など。

<sup>16</sup> 樋口麗陽『小説 果然日米〇〇』（九十九書房、大正10年）など。

<sup>17</sup> 例えば、次のような主張が見られた。「今から五百年ほど前には、蒙古の軍艦数百艘で攻め寄せて来た。これが五百年前の『国難』であつた。大正十年にはお隣の米国から、軍艦を減らしたいといふ相談を持ち掛けられた。これが五百年後の『国難』である」（山川均『井の底から見た日本』〈更生閣、大正13年〉）。

<sup>18</sup> 佐藤鋼次郎（陸軍中将）『日米若し戦はば』（目黒分店、大正9年）など。

<sup>19</sup> 同上。

<sup>20</sup> 溝口白羊『熱血史談第一編 国難』（日本評論社出版部、大正10年）。

<sup>21</sup> 前掲、川添昭二『蒙古襲来研究史論』。

<sup>22</sup> 「鉄箒 国難」（『東京朝日新聞』大正10年4月6日）。

的に好評を博したという<sup>23</sup>。しかし、この映画には軍縮賛成派からの反論がなされるなど議論を呼ぶこととなった<sup>24</sup>。

以上のように、大正期における「元寇」論は、アメリカや社会主義思想の脅威を対象とするものであったが、明治期のように戦争が身近に迫っていたわけではないため、盛り上がりには欠けていた。

## 第二節 明治期及び大正期における「元寇」運動

本節では、明治期及び大正期における「元寇」運動、すなわち元寇に関する国民運動及び政府の対応について考察する。

まず、明治期の元寇をめぐる啓蒙活動を紹介する。この時期の「元寇」運動は、国民主導で行われたという点に特徴がある。一部の国民によって展開された啓蒙活動が、日清・日露戦争と連動しながら、議会や政府、軍などを巻き込み、国民運動の大きなうねりとなっていった。

明治時代の「元寇」論や国民運動の嚆矢としては、先述した湯地丈雄の「元寇記念碑」建設運動が挙げられる<sup>25</sup>。「元寇狂」と呼ばれた湯地による「元寇」運動は、明治 21 年 1 月から開始された。湯地は、清国水兵の暴動である長崎事件（明治 19 年）に触発されて、国民の「護国精神」<sup>26</sup>を高めることの重要性を痛感したのであった。かねてより元寇の遺物に関する記念碑がないことを嘆いていた湯地は、警察署長の職を辞し、人々の記憶から薄れていた元寇の歴史を題材とする啓蒙活動に身を投じていく。この運動は、「護国精神」の象徴物としての「元寇記念碑」建設を目的としながら、軍歌・唱歌の作成やパンフレットの配布、元寇研究の専門書『伏敵編』や啓蒙書『元寇反撃 護国美談』などの出版、全国における講演活動、展覧会・音楽会の実施など、非常に多様なツールを用いて展開された<sup>27</sup>。講演会の聴衆は明治 34 年に 100 万人を超え<sup>28</sup>、運動に呼応した相撲大会（明治 22 年）や演劇（明治 23 年）が各地で催されるなど、社会を巻き込んで盛り上がりを見せた<sup>29</sup>。このように、一方向的な啓蒙活動にとどまらず、対外危機の中で国民が自覚的に呼応することが、明治期の「元寇」運動の特徴である。

「記念碑」建設運動の過程は、折に触れてメディアにより報道され、概ね好意的な論評がなされた<sup>30</sup>。この時期の出版物は、湯地が編纂した『元寇反撃 護国美談』（明治 24 年）だけでなく、小中村義象の『筑紫のあだ波』（明治 23 年）などの啓蒙書についても、国民の「護国精神」を涵養することを目的にしていた<sup>31</sup>。さらに、研究書である『伏敵編』（明治 24 年）でさえ、編纂の目的は「能ク古ヲ以

<sup>23</sup> 「驚天動地 国難 全十五卷（広告）」（『東京朝日新聞』大正 9 年 11 月 10 日）。「演芸 風聞ろく」（『東京朝日新聞』大正 9 年 12 月 5 日）。

<sup>24</sup> 前掲、「鉄箒 国難」。

<sup>25</sup> 運動の経緯については、「元寇記念碑来歴一斑」（古田隆一編『福岡県全誌（下編）』（安河内喜佐吉、明治 39 年））に詳しい。また、国民主導の「元寇」運動としては、湯地の運動以外にも、熊本県の満願寺によって主導された北條時宗の「祠宇」建立運動（明治 24 年）や、日蓮宗徒による「日蓮上人像」の建設（明治 37 年）などがある。

<sup>26</sup> 当時使用された「護国精神」という言葉には、国防意識という意味だけでなく、愛国心や敵愾心、国家意識や国民意識という意味も含まれていると思われる。

<sup>27</sup> 前掲、「元寇記念碑来歴一斑」、前掲、川添昭二『蒙古襲来研究史論』。

<sup>28</sup> 前掲、「元寇記念碑来歴一斑」。

<sup>29</sup> 「元寇記念碑義捐相撲」（『東京朝日新聞』明治 22 年 2 月 26 日）、「元寇軍記の芝居」（『東京朝日新聞』明治 23 年 9 月 25 日）など。

<sup>30</sup> 「元寇記念碑と西郷隆盛の銅像（社説）」（『東京朝日新聞』明治 25 年 4 月 24 日）など。

<sup>31</sup> 柴山居士著、中洲居士補、湯地丈雄編『元寇反撃 護国美談』（青湖堂、明治 24 年）、小中村義象『筑

テ今ニ稽へ、禦侮ノ道ヲ監ミ、敵愾ノ氣ヲ養ヒ、国家ヲシテ永ク金甌無欠ノ国タラシムル」ことであると説明している<sup>32</sup>。

政府や軍も、こうした国民運動の盛り上がりに対応せざるを得なくなっていた。明治 23 年、宮内省は「記念碑」建設運動への資金援助を行ったほか、政府や軍の関係者は湯地が開催する式典や音楽会などに積極的に参加し、賛意を表明するなどしている<sup>33</sup>。これらの対応は、湯地の運動が日清戦争直前の緊張状態において有益と考えられたために行われた可能性が高い。

湯地の「先憂適中して」<sup>34</sup>、日清戦争（明治 27～28 年）が勃発すると、国民によって元寇当時になった戦勝祈願が行われた<sup>35</sup>。また、湯地は戦争への協力も惜しまず、戦地へ元寇の記事が記載された状袋を送っている<sup>36</sup>。さらに、戦地や銃後では湯地の依頼によって作られた軍歌「元寇」が流行し<sup>37</sup>、他にも非常に多くの元寇に関する軍歌が作成された<sup>38</sup>。

日清戦争後の三国干渉（明治 28 年）によって日露関係が悪化する中、国家としても元寇を利用しようとする動きが見られた。明治 30 年には、元寇において活躍した武将 2 名（宗助國、平景隆）に贈位が行われた<sup>39</sup>。湯地はその報告を聞いて感涙したと言われており、翌年には贈位祝祭会を開催している<sup>40</sup>。また、明治 34 年には、帝国議会で元寇殉難者のための「国祭」が建議されている。委員の鈴木重遠は、「今日宇内の形勢を察しますれば何日何時第二の元寇を見ることがあるかも知れませぬ危い時節でありますから、大に日本の人心を奮興さして置かんらん場合でございますから、旁々元寇の殉難者を国祭に付すると云ふことは今日の急務と存じます」と述べており<sup>41</sup>、ロシアとの緊張状態において国民に元寇を想起させることの重要性が示されている。この建議は議会において全会一致で可決されたものの実施には至らなかったため、湯地ら有志による国民主導により、北條時宗を顕彰する「時宗祭」（追祭）として実施された<sup>42</sup>。こうした中、時宗に対する贈位を求める運動も、メディアの賛同を受け、社説で主張されるほどに盛り上がりを見せていた<sup>43</sup>。

日露戦争（明治 37～38 年）が勃発すると、軍歌「元寇」の再流行が起きた<sup>44</sup>。日清戦争時と同様に、元寇にならって各地の神社が自発的に「敵国降伏」の祈禱を行ったほか、上述した「時宗祭」におい

---

紫のあだ波』（大倉書店、明治 23 年）。

<sup>32</sup> 山田安榮編『伏敵編』（吉川半七、明治 24 年）。

<sup>33</sup> 前掲、「元寇記念碑来歴一斑」、前掲、柴山居士『元寇反撃 護国美談』。「元寇記念碑建設音楽会」（『東京朝日新聞』明治 26 年 11 月 23 日）。ちなみに、運動初期には、政府よりも皇室の方が運動に積極的に呼応していたようである。例えば、明治天皇が和歌の勅題に「北條時宗」を設定し皇后がこれに御歌を詠んだ（鷲尾義直『国難と時宗』（牧書房、昭和 16 年））。

<sup>34</sup> 青木矮堂「元寇狂と呼ばれたる湯地丈雄翁」（『海之世界』第 20 卷第 8 号〈日本海員掖済会、大正 15 年〉）。

<sup>35</sup> 「進知会の報国演説」（『東京朝日新聞』明治 27 年 11 月 27 日）。

<sup>36</sup> 「湯地丈雄氏の状袋」（『読売新聞』明治 28 年 4 月 13 日）。

<sup>37</sup> 湯地丈雄『精神教育 元寇反撃 歴史画光栄録』（湯地丈雄、明治 45 年）、金子空軒『逸話 名将の片影』（つはもの発行所、昭和 8 年）。

<sup>38</sup> 軍歌「元寇襲来の歌」、「元寇の変」、「蒙古襲来反撃の歌」など。そのうちの多くが、「日清交戦の歌」など日清戦争に関する軍歌と並べられている。

<sup>39</sup> 「元寇殉難者贈位」（『東京朝日新聞』明治 29 年 11 月 5 日）など。

<sup>40</sup> 「贈位に感涙す」（『東京朝日新聞』明治 29 年 11 月 6 日）、「贈位祝祭会」（『東京朝日新聞』明治 30 年 1 月 10 日）など。

<sup>41</sup> 前掲、鷲尾義直『国難と時宗』。

<sup>42</sup> 「北條時宗追善会」（『東京朝日新聞』明治 35 年 4 月 15 日）など。以降、「時宗祭」は毎年 4 月に開催されている。

<sup>43</sup> 「国家功労者の追賞（社説）」（『東京朝日新聞』明治 32 年 9 月 2 日）など。

<sup>44</sup> 前掲、湯地丈雄『精神教育 元寇反撃 歴史画光栄録』。

でも日露戦争の戦勝祈願が行われたり、戦死者法要で元寇の狂言が披露されたりしている<sup>45</sup>。このように、湯地の啓蒙活動や政府の政策などによって、当時の国民の意識には、「軍事大国」との戦争と元寇の記憶が重ね合わされていた。

日露戦争によって、国民による元寇の想起が活発に行われていた明治 37 年は、国民運動にとって最も重要な年となった。5 月に時宗に対する贈位（従一位）が行われ、12 月にはついに「元寇記念碑」（福岡県福岡市）が落成した<sup>46</sup>。日露戦争中にこうした一連のセレモニーが行われることには、湯地の意図した国民の「護国精神」を涵養するという意義がある。同時代においても、「今日強露と難を構へて干戈相對するに当り、時宗の如き外寇を撃攘したる者の功を追賞するは、之を平常無事の時に於てするよりも、一段深く人心を刺撃するの力あり」と評されている<sup>47</sup>。また、日露戦争の勝敗を決した日本海海戦が「元寇記念碑」の目前において行われたという事実も、国民の「護国精神」をさらに高める効果があったと思われる<sup>48</sup>。

以上、明治期における「元寇」運動は、日清・日露戦争という対外危機の時代にあつて、湯地ら国民主導の啓蒙活動により国民の「護国精神」を養成するために行われ、政府としてもこうした潮流を利用しようと試みたのであった。

次に、大正期の「元寇」運動を考察する。前述のように、大正期において元寇に関する言説は低調となり、内容にも変化が見られるが、国民運動については、明治期から一定の連続性があった。

大正 13 年には、元寇における文永の役から 650 周年を迎え、靖国神社において「元寇文永役殉難者六百五十年祭」が行われた<sup>49</sup>。軍人や学者など総勢 200 名が式典に参加したが、後述する「弘安役六百五十年記念祭」（昭和 6 年）に比べて、規模は小さく公的な性格の薄い式典であった。開催場所が靖国神社であること、大会の名称に「殉難者」が含まれていることからわかるように、文永の役における戦死者の追弔という性格が強く、広く国民を巻き込むことはできなかったのである。実際に、官吏や実業家、学生などの参加が少なかったことが祭典後の反省点として挙げられている。

しかし、大正期の元寇に関する国民運動は全盛期を迎えたという見方もある<sup>50</sup>。例えば、約 15 年間の大正時代において元寇関連人物への贈位は 10 名に及んでおり、明治期（4 名）や昭和期（3 名）よりも圧倒的に多い<sup>51</sup>。これは、国民による贈位の請願運動が活発化したことによるものと捉えることができる。すなわち、贈位が行われる理由はいくつか考えられるが、その主流は国民による請願運動であった<sup>52</sup>。こうした「歴史復興」を目的とする国民運動の高まりは、他の事象においても見られる。例えば、毎年 4 月に行われる鎌倉の「時宗祭」は大正期に至っても継続されているほか、福岡県でも「元寇記念祭」が始まり、毎年 10 月に開催されるようになる<sup>53</sup>。長崎県の鷹島にも「元寇記念之碑」

45 「公私の美挙」（『東京朝日新聞』明治 37 年 3 月 12 日）、「北條時宗六百廿二年祭」（『東京朝日新聞』明治 38 年 3 月 31 日）、「忠魂追弔大法要」（『東京朝日新聞』明治 37 年 5 月 16 日）。

46 ちなみに、明治 37 年は「記念碑」のモデルとなった龜山上皇の崩御から 600 周年でもある。また、「記念碑」のモデルは、北條時宗から龜山上皇に変更されたが、理由は不明とされている。

47 前掲、「北條時宗従一位を贈らる（社説）」。

48 前掲、湯地丈雄『履歴一斑』にも同趣旨の記述がある。

49 祭典の経緯は、賀茂百樹、榊原昇造編『元寇文永役殉難者六百五十年祭記事』（元寇文永役殉難者六百五十年祭事務所、大正 15 年）に詳しい。

50 関幸彦『神風の武士像 蒙古合戦の真実』（吉川弘文館、平成 13 年）。

51 田尻佐編『贈位諸賢伝』（国友社、昭和 2 年）。

52 石川寛「近代贈位に関する基礎的研究」（近現代史研究会編『年報近現代史研究』第 7 巻〈近現代史研究会、平成 27 年〉）。

53 小川彌太郎『元寇と北條時宗』（畝傍書房、昭和 16 年）。

が建立され（大正 5 年）、以降 8 月には記念祭が開催されたという<sup>54</sup>。

以上、大正期においては、目前の脅威や戦争がないことから、明治期のように時局と密接して広く国民を巻き込んだ「元寇」運動が展開されたわけではないが、特定の地域や関係者による自発的な働きかけは、明治期よりも積極的に行われていたと言えよう。

### 第三節 明治期及び大正期における「元寇」関連人物の評価と「神風」意識

本節では、啓蒙書等において元寇が紹介または解説される際に登場する人物（以下、「元寇」関連人物と呼称）及び元寇において吹いたとされる「神風」が、明治・大正期においてどのように評価されているのかについて概観し、元寇の描かれ方や「神風」に対する認識を明らかにすることによって前節までの議論を補足する。

まず、元寇の顛末を簡潔に述べておく<sup>55</sup>。文永 3 年以來、「元」の皇帝・クビライは、日本との修交のため、再三にわたり使者を派遣し、国書を届けようと試みた。しかし、鎌倉幕府の執権・北條時宗は、国書中に「無礼」な表現があるとして、返牒を拒み続けた。その結果、文永 11 年に文永の役が発生した。元軍は、九州北部への上陸を目指し、対馬・壱岐に侵攻した。対馬では守護代・宗助國、壱岐では守護代・平景隆がそれぞれ奮闘したが、衆寡敵せず戦死・自決した。その際、元軍によって島民に対する残虐行為が加えられたとされる。二島を攻略した元軍は、今津から上陸し、日本の武将らとの激しい戦闘が行われた。元軍の最新兵器「てつほう」や集団戦法に日本側は苦戦し、敗退を余儀なくされた。しかし、態勢を立て直すため戦艦に引き返した元軍を暴風が襲い、戦艦もろとも覆滅されたことによって文永の役は終結した。時宗は元軍のさらなる襲来に備えて博多湾沿岸の石塁（防塁）構築などの対策を講じた。クビライによって派遣された使者が、時宗の命令によって斬首されると、再戦は必至となった。この頃、院政を敷いていた龜山上皇は、勅使を伊勢神宮に派遣したり、自ら石清水八幡宮に行幸したりするなど、「敵国降伏」の祈禱を精力的に行っている。弘安 4 年、ついに弘安の役が勃発した。元軍は部隊を二方面に分けて再び博多湾に来襲したが、築造された石塁や河野通有ら武将による抗戦のために上陸を阻まれた。そこに台風が直撃し、元軍は大敗北を喫することになった。

以上の事実関係を前提として、まずは「元寇」関連人物の評価について明らかにする。なお、本論文では、北條時宗、戦闘に参加した武将、龜山上皇、クビライ（及び「元」）、そして当時の国民という五つの主体に絞って分析を行うこととする<sup>56</sup>。

第一に、元寇当時の執権・北條時宗については、明治・大正期を通して、元寇が論じられる際にほとんど必ず言及がある。明治期には、その毅然とした外交姿勢が高く評価され、元寇の勝因として時宗の対応を挙げるものが多い<sup>57</sup>。特に、時宗が元使を斬首させたことは、多くの軍歌に読み込まれる

<sup>54</sup> 長崎県松浦市役所ホームページ

<http://www.city-matsuura.jp/www/contents/1318559922759/>（平成 29 年 2 月 6 日閲覧）。

<sup>55</sup> 元寇の史実は、池内宏『元寇の新研究』（東洋文庫、昭和 6 年）、川添昭二『北條時宗』（吉川弘文館、平成 13 年）などを参考にした。

<sup>56</sup> 同時代の僧・日蓮に関して、明治 24 年に「日蓮は元寇の予言者と謂ふを得べき乎」という論争が起きている。しかしながら、日蓮が元寇に直接的に関与したとは言い難く、また元寇の啓蒙書においても紹介頻度が少ないため、本論文では分析の対象としない。

<sup>57</sup> 佐藤治郎吉編『少年宝庫 日本男児』（東京堂、明治 24 年）など。なお、北條氏全体に対する評価は、承久の乱（承久 3 年）などで朝廷を蔑ろにしたと考えられたために否定的であり、時宗はその例外として肯定的な評価を与えられた（大町桂月『鎌倉武士』（弘学館、明治 42 年）に顕著に見られる）。



ほど、国民の「敵愾心」に訴えかける効果が大きかったものと思われる<sup>58</sup>。大正期も、時宗の勇気を讃えるものが多く見られるほか、「英雄」として時宗を位置付けるものが増えている<sup>59</sup>。こうした肯定的な評価の一方で、批判的な言説も見られる。明治期における代表的な時宗批判としては、小笠原長生（海軍中将）により行われたものがあり、時宗が水軍整備などの「海上防衛」を怠ったことについて、戦略的見地から批判が加えられている<sup>60</sup>。また、大正期には、自由主義的な言論空間の中、時宗の強硬外交がなければ元寇は起こらなかったとして、「元」を擁護し時宗の対応を批判する論調が目立つようになったと言われる<sup>61</sup>。

第二に、元寇の戦闘に参加した武将については、時宗と同様に明治・大正期を通してほぼ必ず紹介されている。宗助國（対馬国守護代）や平景隆（壱岐国守護代）の戦死、河野通有（伊予国御家人）や竹崎季長（肥後国御家人）の奮戦は元寇の勝因として肯定的に評価され、彼らの活躍は軍歌に歌われるほど著名であった<sup>62</sup>。また、明治期の湯地丈雄による啓蒙運動においては、彼らの戦功よりも「護国精神」や「愛国心」が強調された<sup>63</sup>。

第三に、元寇時の「治天の君」であった龜山上皇について、注目すべきは明治期からほとんど全ての啓蒙書において紹介されているという点である<sup>64</sup>。元寇における勝因の一つと考えられた石清水八幡宮における祈禱は、やはり軍歌に読まれるほど著名な事実であった<sup>65</sup>。また、明治期に建立された「元寇記念碑」のモデルには、当初案の北條時宗に代わって龜山上皇が採用された。その理由としては、元寇における上皇の役割に焦点を当てることが、天皇を中心とした国民の統合という明治政府の国家像に合致したものと推察される。

第四に、「元」の皇帝・クビライの評価についてであるが、日本侵攻の野心を持って「無礼」な国書を送った人物として描かれる。また、「元」帝国については地図を用いて表現されることがあり、いかに「大国」であったかが強調されている<sup>66</sup>。こうした表現には「大国」を破ったという自尊心がにじみ出ており、国民の「愛国心」を強化するための手段であったと考えられる。さらに、とりわけ明治期には、元軍が行った対馬・壱岐における残虐行為が詳細に描写された<sup>67</sup>。こうした描写も、国民の「敵愾心」を煽ることによって、「護国精神」を涵養する手法とも考えられる。翻って大正期には、「元」の国書は「無礼」ではなかったとする意見が発表されるなど、明治期とは対照的な評価が現れた<sup>68</sup>。

<sup>58</sup> 「元寇歌」（岡村庄兵衛編『国民軍歌大全』（盛花堂、明治27年））、「北條時宗」（半溪散史『軍人学生必読 進撃新軍歌』（魁真楼、明治27年））などの軍歌に描写がある。

<sup>59</sup> 上田萬年（文学博士）『英雄史談』（広文堂書店、大正5年）、小林鶯里『僕の好きな英雄』（文芸社、大正11年）など。

<sup>60</sup> 小笠原長生（海軍中佐〈当時〉）『日本帝国海上権力史講義』（春陽堂、明治37年）。

<sup>61</sup> 実業之日本社編『日本精神作興歴史読本 国難神風記』（実業之日本社、昭和9年）などに指摘がある。歴史学者の赤松俊秀は、こうした風潮を「誤った国際主義、平等主義」や唯物史観に基づく見方であるとして批判している（赤松俊秀『東亜共栄の歴史』（目黒書店、昭和17年））。

<sup>62</sup> 奥村金次郎『教育 歴史美談』（大日本図書、明治29年）など。軍歌には、「元寇の変」（藤阪新次郎編『帝国軍歌大成』（森才次郎、明治26年））、「蒙古襲来反撃の軍歌」（湯地丈雄『元寇夜物語』（湯地丈雄、明治26年））などがある。

<sup>63</sup> 湯地丈雄、高橋熊太郎『元寇』（東京図書出版、明治32年）。

<sup>64</sup> 例えば、湯地が編纂した『元寇反撃 護国美談』（明治24年）には、龜山上皇の勅使による祈禱の様子が図入りで紹介されている（「龜山上皇ノ宣命ヲ奉シ藤原経任伊勢大廟ニ参拝スルノ図」）。

<sup>65</sup> 軍歌「元寇」（木村弦雄『教育軍歌 本朝正気歌（上編）』（永井勝太、明治22年））、「元寇の変」（鈴木常松『少年尚武 日本歴史軍歌』（積善館、明治26年））など。

<sup>66</sup> 及川儀右衛門『推究的日本歴史（上巻）』（中文館書店、大正15年）など。

<sup>67</sup> 次のような図を付して説明するものも見られた。「蒙古ノ賊兵博多ニ進ミ我戦死者ノ胸腹ヲ割キ肝ヲ食ヒ血ヲ啜ル図」（前掲、柴山居士著、中洲居士補、湯地丈雄編『元寇反撃 護国美談』）。

<sup>68</sup> 国書が「無礼」であったことを否定するものとして、前掲、上田萬年『英雄史談』などがある。

第五に、当時の国民については、明治期の論調が特徴的である。つまり、湯地の運動の一環として出版された『元寇反撃 護国美談』（明治 24 年）は、元寇において国民の「護国精神」が発揮されたことを時宗や武将の活躍や「神風」よりも重視している<sup>69</sup>。こうした評価は、湯地に限らず他の論者によっても主張されており、日清・日露戦争前後の時期の大きな特徴と言える<sup>70</sup>。また、日清戦争後に新たな史料が発見されたことによって、当時の国民の「護国精神」が具体性を持って描かれるようになる。史料は、文永の役後の高麗に対する外征計画に関するものであり、井芹秀重という老人と眞阿という尼の「美談」を伝えていた。前者は、高齢のために出征できない井芹が嫡子と孫を代わりに出征させたというものであり、後者も同種の逸話で、女性であることから出征できない眞阿が代わりに息子らを送り出したという内容であった。その他、臨濟僧の宏覺禅師（東巖慧安）が強い愛国心を持っていたという逸話も紹介されている。こうした史実が着目されることについては、日露戦争の直前という国民の協力が求められた時期において、昭和期に増加することとなる元寇当時の国民を持ち出して現代の国民の意識をただすという論法の萌芽が見られる<sup>71</sup>。

次に、明治・大正期の「神風」意識を明らかにする。啓蒙書等における元寇で吹いた「風」に関する表記については、「大風」や「颶風」が一般的であり、「神風」を好んで用いるものは少数にとどまっていた<sup>72</sup>。さらに、明治後期に国定化された『小学日本国史』（明治 36 年）を始めとする国史の教科書においても、「神風」という表記は採用されず、全て「大風」に統一されている<sup>73</sup>。

また、元寇における「神風」の評価として、手放しで礼賛するもの、つまり元寇の勝因を単純に「神風」に帰する論調は非常に少なかった。確かに、「神風」を礼賛する見方は、鎌倉時代に著された元寇研究の重要史料である『八幡愚堂訓』以来の「神風」認識であり、近代日本の国民の間にも「神風」を期待する心情が垣間見られる<sup>74</sup>。しかしながら、こうした礼賛論が言論空間において多数を占めることはなかったのである。啓蒙書等では、「神風」の現象自体には言及しているものの、「神風」が吹かなかったとしても元寇に勝利したとするものや、「神風」を勝因の一要素に過ぎないとするものなど、消極的な評価が一般的であった<sup>75</sup>。特に顕著なのは、湯地丈雄の著作群であり、「神風」の果たした役割について一貫して懐疑的な立場をとった<sup>76</sup>。彼の目的は国民の「護国精神」を涵養することであり、当時の国民の気概を称揚したことで相対的に「神風」の評価が低下したことには頷ける<sup>77</sup>。

最後に、「神風」という言葉が近代日本においてどのような文脈で使われていたのかを紹介する。興味深いことに、大正期から昭和初期にかけての「自由主義の華やかであった」時期において、「神風」という言葉は、「神がかり」的な主張を繰り返す精神主義者に対する侮蔑の言葉として用いられていた

<sup>69</sup> 前掲、柴山居士著、中洲居士補、湯地丈雄編『元寇反撃 護国美談』。

<sup>70</sup> その他、前掲、小中村義象『筑紫のあだ波』、広島秀太郎『実験記載 日本歴史教授法』（大日本図書、明治 25 年）など。

<sup>71</sup> 『弘安文禄 征戦偉績』（史学会、明治 38 年）。また、上述の赤松は、清国やロシアの脅威を感じた歴史研究者が挙国一致の必要性を感じて元寇の史実を利用したと分析している（前掲、赤松俊秀『東亜共栄の歴史』）。

<sup>72</sup> 前掲、柴山居士著、中洲居士補、湯地丈雄編『元寇反撃 護国美談』にも、「神風」という表記は一切見られず、「颶風」や「大風」で統一されている。

<sup>73</sup> 滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ 明治期から現代まで』（サンライズ出版、平成 18 年）。

<sup>74</sup> 「明治座略評」（『東京朝日新聞』明治 37 年 5 月 30 日）、仲原善忠『児童図書館叢書 日本外交史』（イデア書院、大正 14 年）など。

<sup>75</sup> 前掲、三上参次「蒙古征伐の大計画」、大川周明『日本文明史』（大鏡閣、大正 10 年）など。

<sup>76</sup> 前掲、湯地丈雄『精神教育 元寇反撃 歴史画光栄録』など。

<sup>77</sup> 前掲、太田弘毅「湯地丈雄の元寇撃退再評価運動 護国精神高揚のための三著作」にこの指摘がある。

78. 非科学的な要素を強調する論者を、元寇において偶然にも吹いた「神風」という言葉によって象徴的に表すことができたのであろう。また、後述するが、近代日本において、「神風」という言葉が必ずしも元寇における「風」を指し示さなかったという事実には留意が必要である<sup>79</sup>。

## 第二章 昭和戦前期における「元寇」の想起

本章では、昭和の初年から16年12月の大東亜戦争勃発の直前期まで、つまり、昭和初期の軍縮・協調外交の時期から、満州事変の勃発や国際連盟からの脱退などが起こる「非常時」<sup>80</sup>、そして支那事変を戦っている「戦時」までの、「元寇」論及び「元寇」運動の変遷を考察する。さらに、この時期の啓蒙書等における「元寇」関連人物の評価や「神風」意識についても明らかにする。

### 第一節 昭和戦前期における「元寇」論

本節では、昭和初期から「非常時」、そして「戦時」までに展開された「元寇」論を、時局に沿って考察する。

まず、昭和初期の「元寇」論を紹介する。この時期には、軍縮や社会主義思想の脅威という大正期の論点が継続しているが、より踏み込んだ議論がなされている。つまり、一部の論者によって、現状の外交政策や思想問題に対する不満や批判が、元寇を用いて国民にわかりやすく伝えようと試みられている。

第一に、軍縮を中心とする対欧米協調外交を含む「元寇」論について考察する。注目すべきは、軍縮それ自体に対する不満は大正期と同様に抑制的となっていることである。例えば、西川虎次郎（陸軍中将）の著作『元寇と軍縮』（昭和5年）の表紙には、「元寇襲来は過去の国難 軍縮会議は現代の国難」との文句が見られるが、本文においては「大巡七割の要求を補助艦全部を合して七割に制限せられし如きは大なる問題ではない」とされている<sup>81</sup>。むしろ、西川は、日本に派遣された元の使者を斬首した北條時宗の強硬外交を引き合いに出して、現状の協調的な「欧米崇拜外交」を問題としているのである<sup>82</sup>。

協調外交に対する不満については、時宗への憧憬という形で表されることが多い<sup>83</sup>。国家主義的な

78 白柳秀湖『国難日本歴史』（東洋書館、昭和16年）。ちなみに、大東亜戦争中にも清澤冽（ジャーナリスト）は、鹿子木員信（大日本言論報国会事務局長）らを「神風連中」と呼んでいる（清澤冽『暗黒日記』（評論社、昭和46年）昭和19年3月15日付）。

79 例えば、演劇「神風」（帝劇、大正13年）は元寇を題材としたものであるが、同年の琴曲「神風」（杉浦重剛作）は元寇とは全く関係のない内容である。

80 満州事変以降、国際連盟脱退や「思想国難」などが続発する社会を捉えて「非常時」という言葉が頻用された（文部省社会教育局編『非常時と国民の覚悟』（文部省社会教育局、昭和8年）など）。

81 西川虎次郎（陸軍中将）『元寇と軍縮 公民講座講義録（公民読本第六編）』（大道学館出版部、昭和5年）。その上で、陸軍軍人は、軍縮の危機を精神主義によって乗り越えられると主張した（前掲、西川虎次郎『元寇と軍縮』、荒木貞夫〈陸軍大臣〉「北條時宗公を偲びて」〈北條時宗公鑽仰会編『北條時宗公六百五十年遠諱紀念大講演集』北條時宗公鑽仰会、昭和9年）。また、当然のことながら、この時期の海軍軍人の「元寇」論においても、軍縮に明確に反対することは憚られている。

82 在野には、元寇時の時宗の決断と比較して、軍縮と外交のいずれをも批判する意見もあった（内田良平『日本の亜細亜 皇国史談』（黒竜会出版部、昭和7年））。

83 「[時宗の強硬外交を否定的に見る見解について——筆者注] かういふことを言つて教へる先生があるか

雑誌『日本及日本人』は、歴史上の偉人から構成する「理想の内閣」という特集の中で、時宗を「外務大臣」に据えている<sup>84</sup>。

これらの主張では、アメリカという具体的な国家を元寇における「元」に比しているものも見られるが、多くは外来の「国難」の典型として元寇を持ち出しているに過ぎないように思われる。

第二に、思想問題に関する「元寇」論を考察する。この時期において、軍縮や協調外交以上に国家主義者を悩ませていたのが「思想国難」であった。彼らにとって、社会主義思想という脅威に対して国民があまりにも「無自覚」であるように思われた。そのため、元寇という卑近な例を用いて、警鐘を鳴らす必要があったのである。例えば、「ソヴェートロシヤの強暴な赤化運動は正に元寇の変形」とか、「帝都の真中にさへ赤旗を振りまわす元寇が侵入」といった表現がなされた<sup>85</sup>。そして、「思想国難」は不可視であるため、元寇と比べてより危険なものとして捉えられていた<sup>86</sup>。国家主義者は、こうした「思想国難」を打破するためには、元寇当時のような「義勇奉公の大精神」<sup>87</sup>が必要と考えたのである。

これらの主張では、ソ連を元寇における「元」に重ねているものも散見されるが、軍縮・協調外交を対象とする「元寇」論と同様に、「国難」の代表例として元寇を利用しているという性格が強い。さらに、思想問題は軍事的な脅威ではないことから、元寇との類似性は見出しにくく、論理としては説得力が弱くなっている。

昭和6年9月18日、満州事変が勃発し、いよいよ日本は「非常時」へと突入した。満州事変も「国難」には違いなく、元寇との比較が行われた。ただし、満州事変の交戦国である中華民国は「元」に見立てられていない<sup>88</sup>。これは、戦闘が序盤から優位に進められており、戦場も遠くにあったことから、元寇との類似性が少なかったことが原因と考えられる。彼らは、単に「国難」として元寇に論及するにとどまっていた。

したがって、大正期と同様に、この時期の「元寇」論も切迫したものではない。例えば、佐藤鐵太郎（海軍中将）は、満州事変を文永の役に例えて「警告的国難」と称し、弘安の役のような「決定的国難」に備えることの重要性を説く<sup>89</sup>。明言を避けているものの、佐藤が想定する「決定的国難」とは、アメリカとの対立によって生ずる問題である。同様に、野村吉三郎（海軍大将）も満州事変勃発後の国際情勢を文永の役に例えて、当時のような「挙国一致」を実現することの重要性を述べている<sup>90</sup>。また、この時期には、加藤寛治（海軍大将）や有馬寛（海軍中将）も、元寇当時の「挙国一致」を再現する必要性に言及するにとどまっている<sup>91</sup>。このように、アメリカを仮想敵国とする海軍の関係者

---

ら、所謂『今日の日本の外交』が野放図もなく軟弱になり、果は平和でありさへすれば、国の面目に泥を塗られても我慢する、といふことになって来ます」と論じられた（前掲、実業之日本社編『日本精神作興歴史読本 国難神風記』）。

<sup>84</sup> 「雲間寸観」（『日本及日本人』第154号〈政教社、昭和3年〉）。

<sup>85</sup> 河野省三「蒙古来る北より来る」（『國學院雑誌』第443号〈國學院大學総合企画部、昭和6年〉）、堀内信水（陸軍中将）「元寇眼前に来る」（前掲、『國學院雑誌』第443号）。

<sup>86</sup> 佐伯有義「感想」（前掲、『國學院雑誌』第443号）、鹽谷温（文学博士）「朗読朗吟」（元寇弘安役六百五十年記念会編『元寇弘安役六百五十年記念会紀要』（元寇弘安役六百五十年記念会、昭和9年））など。

<sup>87</sup> 前掲、鹽谷温「朗読朗吟」。

<sup>88</sup> ただし、国際連盟脱退の際には、国際連盟を「元」に見立て、リットン報告書を「元」からの国書に重ねる論もあった（前掲、荒木貞夫「北條時宗公を偲びて」）。

<sup>89</sup> 佐藤鐵太郎（海軍中将）『国難に叫ぶ』（民友社、昭和7年）。

<sup>90</sup> 野村吉三郎（海軍大将）「現代海軍より見たる元寇役」（前掲、北條時宗公鑽仰会編『北條時宗公六百五十年遠諱紀念大講演集』）。

<sup>91</sup> 加藤寛治（海軍大将）『軍縮会議と国民の覚悟』（日本精神協会、昭和10年）、有馬寛（海軍中将）『新

にとっては、満州事変という「国難」が到来したとはいえ、元寇において深刻であった弘安の役ほどの大問題とは考えられていなかったようである。

一方で、満州事変以降、いわゆる「1935、36年の危機」<sup>92</sup>に対応して、海軍関係者の軍縮に対する不満が「元寇」論ににじみ出ている。例えば、佐藤（海軍中将）は、上述の「元寇」論において軍縮に対する不満を述べているほか、野村（海軍大将）や有馬（海軍中将）、小笠原長生（海軍中将）の各「元寇」論においても、元寇当時の日本海軍が脆弱であったことなどが批判的に指摘され、軍縮政策の限界が暗示されているように思われる<sup>93</sup>。

昭和12年7月7日、支那事変が勃発すると、やはり元寇に並ぶ「国難」と捉えられるようになる<sup>94</sup>。ただし、勃発から2、3年は元寇との比較が活発に行われたとは言い難い。その理由として、満州事変と同様に戦場が遠方であり、本土への直接的な脅威が少なかったことが挙げられよう<sup>95</sup>。また、交戦国である中華民国が、日清戦争時のように「元」に見立てられているものも見当たらない。国民政府は、「元」と同じ中国大陆に位置する「支那」には違いないが、日本よりも圧倒的な軍事的優位を持った「大国」とはみなされなかったのである<sup>96</sup>。

しかしながら、事変勃発から3周年を迎えた昭和16年頃から、長期化する戦争を元寇に例える論調が急増する<sup>97</sup>。歴史学者の龍肅は、元寇が文永の役や弘安の役という短期的、局所的な戦いとどまらず、約150年にわたって沿岸警備が行われたとする主張を展開し、国民に対して長期戦への協力を繰り返し請うている<sup>98</sup>。また、支那事変を受けて、政府は国民精神総動員運動を開始するが、後述するように、その際にも元寇の歴史が利用されたのであった。

この時期の興味深い議論として、昭和14年に発生したノモンハン事件を受けて、中野正剛（衆議院議員）が元寇を利用した巧みな政府批判を行っている<sup>99</sup>。彼は、「ノモンハンの戦報を読みながら、直ちに想ひ起さるゝものは元寇の昔である」としながら、軍備の不充実と政府の無策を批判した。つまり、ソ連軍の「精鋭なる機械化部隊」に、軍備で劣る日本軍が苦戦したことを、元軍の集団戦法や新兵器に悪戦苦闘した元寇当時の武将に重ね合わせたのである。中野は、文永の役後に鎌倉幕府によって行われた「精神主義」とらわれない「物心両面」にわたる立て直しを評価している。そして、ノモンハン事件を文永の役に比するとともに、今後起こるであろう衝突を予見し、軍備の充実と政府の毅然とした対応を求めている。ここでは、既述の思想問題とは異なり、ソ連が明確に「軍事大国」として「元」に比されている。この時期において、ソ連は「赤化運動」の拠点としてだけでなく、「軍事大国」として認識されるようになっていたのである。

---

興日本の国防（海軍篇）』（日本青年館、昭和11年）。

<sup>92</sup> この時期、国際連盟脱退通告の発効（昭和10年）やワシントン・ロンドン両海軍軍縮条約の期限満了（昭和11年）などによって国防に不安が生ずることをこのように称した。

<sup>93</sup> 前掲、佐藤鐵太郎『国難に叫ぶ』、前掲、野村吉三郎「現代海軍より見たる元寇役」、小笠原長生（海軍中将）『花ふゞき』（三幸堂書店、昭和10年）、前掲、有馬寛『新興日本の国防（海軍篇）』。

<sup>94</sup> 仲小路彰『元寇』（世界興廢大戦史全集刊行会、昭和12年）など。

<sup>95</sup> この事実は、同時代においても認められている（火野葦平「文化人の決意（上）」『読売新聞』昭和16年9月6日夕刊）。

<sup>96</sup> むしろ、国民政府の背後にあると考えられたイギリスなどを「元」に見立てる論調があった（岩佐圭造『神戦』（アジア青年社、昭和15年））。

<sup>97</sup> 中井良太郎（陸軍中将）『日本古戦史の真価』（洛陽書院、昭和16年）、龍肅「元寇の撃攘と長期の防衛」（国史回顧会『国体宣揚史綱』（国史回顧会、昭和16年））、石渡莊太郎（翼賛会事務総長）「殉国の精神で働け 一億同胞へぶちまける熱情」（『読売新聞』昭和16年8月30日夕刊）など。

<sup>98</sup> 龍肅「弘安の百年戦争 尊しわが伝統の精神」（『読売新聞』昭和16年8月12日）など。

<sup>99</sup> 中野正剛（東方会々長）『難局打開の経緯 紀元二千六百年・日本興廢の岐路』（東大陸社、昭和15年）。

支那事変のさなか、国民にもアメリカやソ連という新たな「大国」の脅威が増しつつあると感じられたようである。『読売新聞』の投書欄には、「事変勃発この方僅か三年に足らずして何んと女々しき泣き言の多く、弱々しき不平の満てる、これでよいのか、これで行けるのか、大陸の沙漠の彼方には赤いモーシ〔蒙古の転訛——筆者注〕がある。太平洋の彼岸には虎視眈々たる白いモーシがある」という読者の声が掲載されている<sup>100</sup>。米ソという「軍事大国」に対する国民の漠然とした恐怖が元寇を通じて端的に表されていると言えよう。

昭和 16 年、支那事変の長期化がいよいよ進み、アメリカとの関係が極度に緊張すると、アメリカと「元」の比較が本格的に行われ始める。例えば、中井良太郎（陸軍中将）は、「元の恫喝外交に対する我国の無言強硬外交は、後世吾人の範とするものがあらう。米国の恫喝などに対しては、宜しく時宗式気分であらねばならぬ」と述べ、日本を圧迫する「大国」アメリカに対して厳しく応ずるべき旨を示している<sup>101</sup>。

以上のように、昭和初期から満州事変・支那事変の勃発に至っても、主として元寇はあくまでも将来の危機という位置付けであり、「元寇」論は盛り上がりを欠いていた。これは、アメリカやソ連という「大国」との関係が軍事的に緊張したわけではなく、軍人らによる国民への啓蒙という性格が強かったためであると考えられる。しかし、支那事変が長期化し、対米関係が悪化する中で、「元寇」論が本格的に戦争協力を要請する手段として確立されていく。

## 第二節 昭和戦前期における「元寇」運動

本節では、昭和戦前期における「元寇」運動、すなわち元寇に関する国民運動や文化について考察する。

この時期の元寇に関する国民運動として特筆すべきは、昭和 6 年 7 月に開催された「元寇弘安役六百五十年記念祭」である<sup>102</sup>。昭和 6 年は、元寇における弘安の役から 650 周年にあたるため、それを記念する祭典が催されたのである。この祭典は、大正期に行われた「元寇文永役殉難者六百五十年祭」と関係者などは重複しているが、より大規模で、多角的な活動が行われている。すなわち、開催場所は、東京を中心として鎌倉や全国各地、満州にまで及び、内務、文部、陸軍、海軍の各省、東京市の後援を受けるなど政府・軍の大きなバックアップを得ている。また、日比谷公会堂で行われた講演のほか、ラジオにおける講演や琵琶の演奏、演劇の開催、パンフレットやポスターの配布、軍歌「元寇」の普及活動など、広く国民を巻き込もうとする意図が見られる。実際に、前回の記念祭とは異なり、殉難者の追弔に限らず、国民精神を作興して「思想国難」に備えることが主眼とされていた。国家主義的な雑誌もこの動きに呼応して、元寇 650 周年特集を組んでいる。『國學院雑誌』を始め、『日本及日本人』や『原理日本』など少なくとも 18 誌で元寇に関する論文などが掲載され、「思想国難」の打

<sup>100</sup> 「読者眼 蒙古来」（『読売新聞』昭和 14 年 12 月 11 日）。

<sup>101</sup> 前掲、中井良太郎『日本古戦史の真価』。その他、アメリカと「元」の比較として、前掲、鷲尾義直『国難と時宗』、宮本武之輔（企画院次長）「日曜新論 祖国を守る道 民族精神の昂揚を望む」（『読売新聞』昭和 16 年 8 月 24 日）などがある。

<sup>102</sup> 祭典の経緯については、前掲、元寇弘安役六百五十年記念会編『元寇弘安役六百五十年記念会紀要』に詳しい。この祭典とは別に、同年 6 月にも上泉徳彌（海軍中将）らによって「元寇記念祭」が開催されている（「一足先に あす元寇記念祭」〈『読売新聞』昭和 6 年 6 月 4 日〉）。ちなみに、この年には昭和期において唯一の贈位が行われている（「元寇役の勇士三名に御贈位」〈『東京朝日新聞』昭和 6 年 10 月 21 日夕刊〉）。

開などが訴えられている<sup>103</sup>。しかしながら、戦争が身近であった明治期における湯地の啓蒙活動とは異なり、国民の広範な支持を得ていたとは言い難い。なぜなら、その他の雑誌や主要なメディアでは、650周年の特集どころか、元寇に関する議論自体がほとんど行われていないからである。

昭和8年には、北條時宗の薨去から650回忌ということもあり、北條時宗公鑽仰会の主催で、毎年鎌倉で行われていた「時宗祭」の規模を拡大した「北條時宗公六百五十年遠忌」が催された<sup>104</sup>。野村吉三郎（海軍大将）と荒木貞夫（陸軍大臣）が満州事変後の日本を取り巻く国際情勢と元寇を絡めた講演を行ったほか、由比ヶ浜で野外劇「出陣」が上演されたり、記念の絵葉書が作成されたりした。「時宗祭」や野外劇の様子はラジオで中継されるなど、ある程度の注目を集めている<sup>105</sup>。

その他、先述した福岡県における「元寇記念祭」も継続して行われているほか、昭和7年には元寇の殉難者を祀る神社の創建に関する願書が当局に提出されるなど、有志による「元寇」運動は昭和期に入っても衰退していないことがわかる<sup>106</sup>。ただし、神社創建に関しては機運が高まっていないことが問題点として挙げられており、やはり国民の元寇に対する関心が高いとは言えない。

戦時色がいよいよ強まった昭和16年には、650周年に引き続き、元寇660周年記念行事が各地で開催されている。九州では、9月に二つの「元寇六百六十年記念祭」がそれぞれ開催されているほか、東京でも11月に読売新聞社の主催、大政翼賛会の後援で、菊花大会「元寇六百六十年記念大会」が大々的に行われている<sup>107</sup>。また、元寇660周年に合わせ、俳人の高濱虚子は「能楽報国」の一環として、能楽「時宗」を完成させた<sup>108</sup>。

次に、この時期の元寇に関する文化を紹介する。昭和12年7月の支那事変勃発を受けて開始された国民精神総動員運動は、元寇を題材とする芸術作品にも大きな影響を与えている。例えば、映画「蒙古襲来 敵国降伏」（松竹、昭和12年）は、こうした時代背景の中で制作された啓蒙映画の一つである。実際に、内務省が検閲手数料を免除していることから、この映画が政府の政策にかなっていたことがわかる<sup>109</sup>。映画の広告には、「光荣ある我等の祖先が当時全世界最強を誇った元に対し如何に、挙国一致これを撃破したかを再認識するは我等子孫の義務であらねばならぬ」とされており、支那事変下における国民の協力が要請されている。ただし、この映画の内容は、評論家によって酷評されており、この時期のある程度自由な言論空間を示しているものと言えよう<sup>110</sup>。また、支那事変中には、「国威発揚」を目的とする展覧会がいくつか開かれており、昭和13年5月から6月にかけて大阪城天守閣において催され、元寇関連の史料などが展示された「元寇展」や、同じく5月から6月まで東京朝日新聞社によって東京府美術館で開かれ、元寇関連の美術品が展示された「戦争美術展覧会」な

<sup>103</sup> 「元寇弘安役六百五十年記念文献」（『國學院雑誌』第444号〈國學院大學総合企画部、昭和6年〉）。

<sup>104</sup> 「由比ヶ浜で大野外劇 時宗六百五十年祭に」（『東京朝日新聞』昭和8年3月26日）など。講演内容は、前掲、北條時宗公鑽仰会編『北條時宗公六百五十年遠諱記念大講演集』に収められている。ちなみに、北條時宗公鑽仰会は、「北條時宗公ノ偉徳ヲ鑽仰」することを目的に設立された団体で、毎年4月に「時宗祭」を開催している。

<sup>105</sup> 「北條時宗公六百五十年遠忌法要」（『東京朝日新聞』昭和8年4月3日）など。

<sup>106</sup> 前掲、小川彌太郎『元寇と北條時宗』。

<sup>107</sup> それぞれ、「元寇の役から六百六十年の秋 非常時に記念の催し」（『朝日新聞』昭和16年8月31日）、前掲、火野葦平「文化人の決意（上）」、「元寇を偲ぶ 六百六十年を記念し来月から 多摩川園の菊人形」（『読売新聞』昭和16年9月30日夕刊）など。東京における記念祭は、映画「蒙古襲来 敵国降伏」（松竹）や元寇に関する童話・琵琶、新舞踊「伊勢の神風」などの余興を伴った。

<sup>108</sup> 高濱虚子「能楽報国の一作 世に問ふ「時宗」」（『朝日新聞』昭和16年10月25日）。

<sup>109</sup> 「蒙古襲来 敵国降伏（広告）」（『東京朝日新聞』昭和12年9月27日夕刊）。

<sup>110</sup> 「新映画評 内務省が推奨の松竹下加茂映画 “敵国降伏” 平凡な鎌倉幕府の挿話」（『東京朝日新聞』昭和12年10月6日夕刊）。

どがある<sup>111</sup>。さらに、日清戦争時に作曲された軍歌「元寇」は、事変の勃発によって再流行を博したという<sup>112</sup>。これは、支那事変が、日清戦争に続く「支那」との戦争という共通点があるためだと思われる。その他、元寇関連の音楽としては、他に琵琶「北條時宗」や「元寇」があり、昭和6年頃からラジオにおいて継続的に放送されている<sup>113</sup>。

以上のように、戦時色が強まるにつれ、国民主導によって元寇を利用した「国民精神作興」や「国威発揚」が図られ、政府としてもこうした国民運動・文化を積極的に活用していった。

### 第三節 昭和戦前期における「元寇」関連人物の評価と「神風」意識

本節では、昭和戦前期の啓蒙書等における「元寇」関連人物や「神風」の評価を明らかにし、元寇において重視された要素や「神風」意識を分析することによって前節までの議論を補足する。

まずは、元寇に関係する主要な人物の評価について明らかにする。第一に、北條時宗に対する評価は、明治・大正期と同様にほとんどが肯定的なものである<sup>114</sup>。ただし、その視点は、明治・大正期から変化が見られる。つまり、時宗の外交における「果敢」を評価したり「英雄」として描いたりするものに加えて、昭和12年頃から時宗が皇室を尊重していたことを賞賛するものが登場する<sup>115</sup>。それらは、幕府に「元」の国書が伝えられた際に、時宗が朝廷に裁可を求めた事実を強調するものであった。こうした論調の増加には、支那事変の勃発（昭和12年）を受けて実施された天皇を中心とする国家の実現を目的とする国民精神総動員運動との関連性が指摘される。一方で、時宗に対して否定的な論調としては、小笠原長生（海軍中将）以来の軍関係者による戦略的な分析があり、幕府の消極的な防衛政策を批判するものであった<sup>116</sup>。

第二に、元寇の戦闘に参加した武将の評価であるが、明治・大正期と同様、宗助國や平景隆の戦死、竹崎季長や河野通有らの奮戦が紹介されることに大きな変化は見られない<sup>117</sup>。

第三に、龜山上皇については、啓蒙書においてほとんど必ず紹介されている<sup>118</sup>。ただ、祈禱の事実のみを紹介しているものが目立ち、何らかの評価が加えられているわけではない。それでも、支那事変中には、上皇を「国難打開」の象徴と解する場合があり、例えば近衛文麿首相は龜山上皇が描かれた絵画を首相官邸に飾っている<sup>119</sup>。また、昭和16年の元寇660周年に合わせ、上皇を主題とする書

<sup>111</sup> 前掲、川添昭二『蒙古襲来研究史論』。「東朝創刊五十周年記念事業 来る十八日から 東京府美術館」（『東京朝日新聞』昭和13年5月15日夕刊）など。

<sup>112</sup> 鷺尾雨工『英雄時宗続篇 元寇』（フタバ書院成光館、昭和18年）。

<sup>113</sup> 「神風さつと粉碎す敵船四千 びは「北條時宗」（『東京朝日新聞』昭和6年11月13日）、「海底に消えし十萬の蒙古軍 びは「元寇」（『東京朝日新聞』昭和6年7月1日）など。

<sup>114</sup> 岡本瓊二『少年英雄偉人物語』（第一出版協会、昭和4年）など。また、時宗は元寇の中心人物と捉えられており、『尋常小学国史』（大正9年）から『小学国史 尋常科用』（昭和9年）までの国史教科書における元寇に関する記述の「表題」は「北條時宗」とされている。これは人物を通して歴史を見る「人物中心主義」による歴史教育の特徴と言える（前掲、滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ 明治期から現代まで』）。

<sup>115</sup> 前掲、仲小路彰『元寇』、前田晁『少年国史物語（第三巻）』（早稲田大学出版部、昭和12年）、渡邊幾治郎『皇国大日本史』（朝日新聞社、昭和15年）など。

<sup>116</sup> 武谷水城「元寇と我が鎌倉武士の奮戦」（『日本及日本人』第242号（政教社、昭和7年））、井上清純（海軍大佐）『万古を貫く大精神』（地湧日本社、昭和13年）。

<sup>117</sup> 高須芳次郎『海の二千六百年史』（海軍研究社、昭和15年）など。

<sup>118</sup> 満川亀太郎『日本外交史』（国史講座刊行会、昭和8年）など。

<sup>119</sup> 「近衛さんへ国難打開の絵」（『朝日新聞』昭和16年4月29日夕刊）。



籍が元寇六百六十年記念龜山天皇報恩会によって出版された<sup>120</sup>。

第四に、「元」の皇帝・クビライ及び「元」帝国について論ずる。興味深いことは、昭和 7 年に蒙古人を含む「五族協和」をスローガンに掲げる満州国の建国がなされた後においても、「侵略欲」を持った野心家としてのクビライに対する否定的な評価や、対馬・壱岐における元軍の残虐行為が描かれることに変化が見られないことである。また、政府がこうした描写に対して何らかの策を講じた形跡も確認できない。アジア人による「東亜建設」の見地から教科書に蒙古を蔑視する表現があることを批判する論者がいたことも事実ではあるが、こうした主張は極めて少数にとどまっていた<sup>121</sup>。

また、元軍の残虐性を強調する議論には、日本側の「博愛」について論及するものがある<sup>122</sup>。それらは時宗が元軍の捕虜を厚遇したことや戦死者を追悼したことを指摘することで、日本が「元」に比べてどれだけ「文明的」であったかを強調する意図があったと考えられる。

元軍の残虐行為については、次のような興味深い言説も見られた。支那事変が長期化していた昭和 16 年に中井良太郎（陸軍中將）は、「元軍のやうな凌辱掠奪等は、一時的に士気を昂げるかも知れぬが、反対に相手の敵愾心を増すに至るもので、所詮非人道戦法は最期の敗亡者になると思ふ」と述べている<sup>123</sup>。こうした主張は、同年 1 月に東條英機陸相の示達した、いわゆる「戦陣訓」の内容に類似しており、支那事変における日本軍の残虐行為を抑止する意図を含んでいたものと思われる。

第五に、元寇当時の国民の評価であるが、外征計画における井芹秀重や眞阿尼の逸話の紹介頻度が増えている<sup>124</sup>。また、宏覺禪師の「元」に対する強硬姿勢や「敵国降伏」の祈禱、愛国心を詠んだ和歌が紹介されるなど、幕府や朝廷の指導者だけではなく、老若男女を問わず、国民一人一人が愛国心を持って戦争に協力していたという側面が重視されるようになった<sup>125</sup>。先述した「元寇弘安役六百五十年記念祭」における演劇「元寇劇」では船頭が主人公とされており、やはり非戦闘員の戦争協力が強調されている<sup>126</sup>。こうした「国民目線」のストーリーが増加した理由としては、総力戦体制の構築のために「銃後」の国民の協力が重視されるようになったことが考えられる。

次に、この時期の「神風」意識について分析する。元寇を解説または紹介する言論では、明治・大正期と同様に、元寇において吹いた「風」を「颶風」や「暴風」などの中立的な言葉で表記している。また、「所謂神風」という表現が用いられたことから読み取れるように、公然と「神風」という表記を用いることは憚られたようである<sup>127</sup>。しかし、国史の教科書については、この時期に改訂が行われ、『尋常小学国史』（昭和 9 年）において従来の「大風」から「神風」に表記の変更が加えられた<sup>128</sup>。

また、「神風」に対する評価は、明治・大正期と同じく、元寇の勝因として礼賛する論調は極めて少ない。確かに、小説や物語、歌詞などにおいては、元寇の勝因を単純化したり情緒的に表現したりす

<sup>120</sup> 山田無文『龜山天皇御事蹟』（元寇六百六十年記念龜山天皇報恩会、昭和 16 年）。

<sup>121</sup> 稲葉岩吉『新東亜建設と史観』（千倉書房、昭和 14 年）。

<sup>122</sup> 前掲、武谷水城「元寇と我が鎌倉武士の奮戦」、井野邊茂雄『実業帝国小史』（中文館書店、昭和 11 年）、前掲、小川彌太郎『元寇と北條時宗』など。

<sup>123</sup> 前掲、中井良太郎『日本古戦史の真価』。

<sup>124</sup> 渡邊世祐（文学博士）「弘安の役に於ける国民の意気」（前掲、元寇弘安役六百五十年記念会編『元寇弘安役六百五十年記念会紀要』）、萩野由之『日本史講話』（明治書院、昭和 14 年）など。

<sup>125</sup> 朝日新聞社編『二千六百年文化史物語』（朝日新聞社、昭和 15 年）、「紀元二千六百年（3） 鮮血をもって国土を護る 元寇の役と日本女性」（『朝日新聞』昭和 15 年 11 月 12 日）など。

<sup>126</sup> 竹内榮喜（陸軍少将）「元寇当時の日本国民に就て」（前掲、元寇弘安役六百五十年記念会編『元寇弘安役六百五十年記念会紀要』）。

<sup>127</sup> 長井正治『少年 国史上の外交関係』（大同館書店、昭和 12 年）など。

<sup>128</sup> 前掲、滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ 明治期から現代まで』。

るために「神風」を賞賛するものも見られるが<sup>129</sup>、これらは例外的であり、依然として「神風」は元寇の勝利の主因とはみなされていなかった。具体的には、「神風」が吹かなくても元寇に勝利していたとする論調が多く見られたほか、「人事」を尽くした後にこそ「神風」が吹くという主張も出現している<sup>130</sup>。後者の主張は、歴史的な事実として元寇当時の国民の努力を賞賛するだけでなく、元寇において吹いた「神風」を教訓として、現代の国民を啓蒙するために行われたと考えられる。

この時期の「神風」という言葉の用法としては、第一次上海事変（昭和7年）や支那事変の戦場で吹いた自軍に有利な風のことを「神風」と呼んでいるほか、ドイツのポーランド侵攻（昭和14年）など、日本を窮地から救う可能性がある事象についても「神風」と表現している<sup>131</sup>。ただし、こうした文脈で、元寇が論及されることはなかった。さらに、「神風」を冠した作品として、山下騏一郎作詞の琵琶「吹けよ神風」（昭和11年）や山田耕筰作曲の交響詩「神風」（昭和14年）は、明確に元寇を題材とした作品であるのに対して、朝日新聞社の亜欧連絡飛行企画に用いられた航空機「神風」号（昭和12年）の名称のように、元寇に限定しない用法も見られた。以上の事実から、近代日本の「神風」に対する認識は、必ずしも元寇に直結していなかったことがわかる<sup>132</sup>。

### 第三章 大東亜戦争下における「元寇」の想起

本章では、大東亜戦争下の元寇をめぐる言説やプロパガンダ、国民運動・文化が、戦局に応じてどのように変化したのかを分析する。また、この時期の啓蒙書等における「元寇」関連人物の評価、「神風」意識についても明らかにする。

#### 第一節 大東亜戦争下における「元寇」論

昭和16年12月8日、大東亜戦争が開戦した。本節では、メディアや時局即応の出版物における、大東亜戦争の戦局に応じた「元寇」論の変遷を明らかにする。

この時期、元寇は専ら対米関係になぞらえられるようになっており、早くも開戦の翌日には、「六百年前時宗の決意そのまゝがいま東條首相の決断となつて発揮された」とするコラムが『読売新聞』に

---

<sup>129</sup> 菊池寛『曾我仇討・元寇物語』（新日本社、昭和11年）、前掲、「神風さつと粉碎す敵船四千 びは「北條時宗」」など。「神風」礼賛に徹している論者もおり、その代表格が秋山謙藏（國學院大學教授）である（秋山謙藏『日支交渉史研究』（岩波書店、昭和14年）など）。彼は大東亜戦争中にも「神風」礼賛を繰り返しており、清澤冽に批判された（前掲、清澤冽『暗黒日記』昭和20年4月5日付）。

<sup>130</sup> 前者の論調として、大阪國學院『偉大なる日本民族』（大阪國學院、昭和5年）など。後者として、田尻昌次（陸軍中佐）『元寇 国防叢書第一編』（織田書店、昭和3年）、栗山周一『少年元寇と北條時宗』（大同館書店、昭和8年）など。

<sup>131</sup> 戦場の「神風」について、第一次上海事変（中森莞卿『世界はどうなる 軍事・政治・経済界の羅針盤』（精文館、昭和7年））と支那事変（「毒ガスに神風吹く」〈『東京朝日新聞』昭和13年7月8日〉、「戦線佳話 日本軍の味方 支那の神風 荒れ狂ふ風の中を突撃」〈『東京朝日新聞』昭和14年3月19日〉）における用例がある。海外の事象として、ポーランド侵攻（芦田均「神風のおとづれ 第二次世界大戦に寄す（3）」〈『東京朝日新聞』昭和14年9月6日〉）と独ソ不可侵条約（「鉄箒 天来の警告」〈『東京朝日新聞』昭和14年8月23日〉）に関する用例がある。

<sup>132</sup> 「神風」意識に関する同時代の論評として、小林秀雄「社会時評（1） 神風といふ言葉 歴史の偶然と日本人の心」（『東京朝日新聞』昭和14年10月5日）がある。

掲載された<sup>133</sup>。大正期から細々と唱えられてきたアメリカを対象とする「元寇」論が、ようやく大手を振って主張されるようになったのである。アメリカは、地理的には「元」と全く異なる場所にあるが、日本と比較して領土、人口、軍事力等において優越している「大国」であり、元寇における「元」になぞらえるには格好の国家であった。そのため、元寇と大東亜戦争を比較して、類似点や相違点を挙げる言論は非常に多くなっている。その目的は、戦争初期においては、国民に戦争の重大さを自覚させ、戦争に協力させることであり、大東亜戦争は「第二の国難」や「第二の元寇」と表現された<sup>134</sup>。

元寇との共通点を挙げるものの中には安直な指摘が多く、その一つが「1941年」という年の因縁への言及である<sup>135</sup>。思想家の大川周明は、「想へば一九四一といふ数は、日本に取りて因縁不可思議の数であります。元寇の難は皇紀一九四一年であり、英米の挑戦は西紀一九四一年であります」と述べており<sup>136</sup>、元寇と大東亜戦争の「運命」を情緒的に暗示している。さらに、開戦時の首相である東條英機と北條時宗を並び称し、「敵、北より来れば北條、東より来れば東條」などといった言葉遊びも流行している<sup>137</sup>。

一歩踏み込んだ比較を行うものとして、前川晃一の『第二の元寇』（昭和18年）がある<sup>138</sup>。そこでは、「元寇において然りしが如く」というフレーズが繰り返され、交戦国の意図や残虐性、戦争の性格など大東亜戦争と元寇の共通点が列挙されている。そして、現代の国民に、元寇当時における「挙国一致」や「伝統的信念」を求めたのであった。

他にも、元寇から積極的に教訓を読み取って、当時の外交や戦略などを「現代化」すべきであるという主張が行われた<sup>139</sup>。また、国民の戦争協力の根拠として活用するため、元寇時代に米穀国家管理や国民徴用制度に類する施策があったことを指摘するものも見られた<sup>140</sup>。その他、時宗による元使斬首を参照し「防諜」の重要性を説くものや、空襲を「空の元寇」と表現した「防空」に関するものなどがあった<sup>141</sup>。

しかしながら、昭和16年から18年にかけて、「元寇」論が言論空間に横溢したとは言い難い。実際に、『読売報知』は昭和18年12月の時点で、「日米間には、いまだ「元寇の役」は行はれるところまで行つてゐない」と断言しているのである<sup>142</sup>。その理由は、元寇との類似性の弱さであろう。確かに、大東亜戦争はアメリカという「軍事大国」と戦火を交えていることから、元寇との類似性が指摘されていた。だが、元寇の本質は、本土へと侵攻する敵軍への迎撃という点にあった。したがって、

<sup>133</sup> 「よみうり波長」（『読売新聞』昭和16年12月9日夕刊）。

<sup>134</sup> 關靖『国難と北條時宗』（長谷川書房、昭和17年）、前川晃一『第二の元寇』（大阪新聞社出版部、昭和18年）、武藤貞一「日曜新論 第二の元寇役 一敵米国の戦力を衝く一」（『読売報知』昭和18年12月5日）。

<sup>135</sup> 大川周明『米英東亜侵略史』（第一書房、昭和17年）、前掲、前川晃一『第二の元寇』、峯岸米造『輝く皇国史』（三省堂、昭和19年）。他に、「辛巳」の年に注目する山上八郎『戦争と日本民族』（文明社、昭和17年）、「12月8日」に注目する中野八十八『憂国の志士』（清水書房、昭和18年）がある。

<sup>136</sup> 前掲、大川周明『米英東亜侵略史』。

<sup>137</sup> 尾關岩二編『枢軸の偉人』（文祥堂、昭和17年）。その他、前掲、大川周明『米英東亜侵略史』、前掲、前川晃一『第二の元寇』。

<sup>138</sup> 前掲、前川晃一『第二の元寇』。

<sup>139</sup> 中井良太郎（陸軍中將）『長期戦の国史考』（国民新聞社出版部、昭和17年）、前掲、山上八郎『戦争と日本民族』。

<sup>140</sup> 龍肅「大東亜戦争第三年 勝利の年へ 思へ、元寇の百五十年戦争 “時宗の血”我等にも 百難不撓、祖先の偉業を汚すな」（『読売新聞』昭和16年10月12日）。

<sup>141</sup> 山本石樹『日本防諜史』（人文閣、昭和17年）など。「来るか“空の元寇”」（『読売報知』昭和18年4月9日夕刊、10日夕刊）。

<sup>142</sup> 前掲、武藤貞一「日曜新論 第二の元寇役 一敵米国の戦力を衝く一」。

米軍が本土に肉薄していないと考えられた昭和 18 年の段階において、「元寇」論は比較的低調となっていたのである<sup>143</sup>。

しばしば、元寇は「神州不滅」とされた日本の歴史において、唯一外国に領土を侵犯された歴史として紹介された。元寇において元軍は、まず日本の領土である対馬・壱岐を侵した。両島の守備隊は奮戦したものの、衆寡敵せず全滅し、博多湾への進軍を許した。つまり、日本の「領土」において、「本土」へと迫る敵軍に、「奮闘」「敗北」という状況が生まれれば、国民は元寇における対馬・壱岐を想起せざるを得なかったのである。

こうした凄惨な状況は、昭和 19 年 2 月、米軍のマーシャル諸島上陸となって初めて現れた。マーシャル諸島は第一次世界大戦後、日本の委任統治領となっており、当時の人々には日本の領土と捉えられていた。ここに米軍が上陸し、激戦が行われたことは、否応なく元寇の対馬・壱岐を彷彿させたようであり、『朝日新聞』『読売報知』『毎日新聞』各紙の第 1 面において、「元寇」の文字が踊っている<sup>144</sup>。例えば、『朝日新聞』は「元寇以来六百有余年外敵を領土に迎へたことのなかつた不滅神州の一角に敵兵を上陸させて目下果敢なる邀撃戦を展開しつつある」と論じ、『読売報知』も「今やマーシャルの颯風天に連りて黒く、海を蔽ひて来るものは蒙古ならずして外道米鬼である。こゝに神州の一角又も汚さる」としている<sup>145</sup>。このように、いずれのメディアにおいても、日本の領土である「神州の一角」に敵軍が攻め寄せたことを強調しているのである。ここで注目すべきは、従来の議論のように単純に戦争全体を元寇に例えるのではなく、マーシャル諸島の失陥を元寇の前哨戦に位置付けていることである。

その後、サイパン島（昭和 19 年 7 月）、マリアナ諸島（同年 8 月）、硫黄島（昭和 20 年 3 月）、沖縄本島（同年 6 月）と敗北を重ねるごとに、それぞれがやはり元寇の対馬・壱岐になぞらえられた<sup>146</sup>。例えば、サイパン陥落を受けて、思想家の徳富蘇峰は「われ等はこの機会において、わが鎮西博多湾頭に押寄せ来れる古元十万の兵みな殺しにしたる往時を回顧せざるを得ない」と述べており<sup>147</sup>、また、硫黄島の守備にあたった栗林忠道（陸軍中将）は「小職は壱岐、対馬を失ひ〔中略〕玉砕すといへども多々良浜辺の戦捷克く皇国を安泰ならしめたる元寇の古事を偲びつつも神州の不滅を確信し」と陸軍大臣に報告している<sup>148</sup>。さらに、昭和 19 年 3 月の硫黄島の失陥後、小磯國昭首相は、「壱岐対馬の失陥はやがて敵の軍勢を玄界灘の藻屑と消えしむる前提であつたのである。同様に硫黄島の失陥もまた大東亜戦争終局の勝利を獲得すべき前提たらしめねばならぬ」と述べている<sup>149</sup>。

<sup>143</sup> ただし、昭和 18 年 5 月、アッツ島において日本軍の守備隊が「玉砕」したことについては、宗助國（対馬国守護代）や平景隆（壱岐国守護代）の戦死・自決になぞらえるものが見られる（文部省編『高等科修身 一 男子用』〈文部省、昭和 19 年〉、松波治郎『水軍の伝統』〈彰文館、昭和 19 年〉など）。

<sup>144</sup> 「我にあり必勝の信念 一億難局に挺身せん 元寇以来戦火帝国領土に波及」（『朝日新聞』昭和 19 年 2 月 5 日夕刊）、「風塵録」（『読売報知』昭和 19 年 2 月 6 日）、「航程今や十時間 硝煙近し“昭和の元寇”」（『毎日新聞』昭和 19 年 2 月 6 日）。こうした各紙の特徴は、清澤冽が日記に特記するほどの印象的なものであった（前掲、清澤冽『暗黒日記』昭和 19 年 2 月 6 日付）。

<sup>145</sup> 前掲、「我にあり必勝の信念 一億難局に挺身せん 元寇以来戦火帝国領土に波及」。前掲、「風塵録」。

<sup>146</sup> サイパン島に関して、「婦女子も敢然協力 まさに元寇の壱岐」（『朝日新聞』昭和 19 年 6 月 28 日）など。マリアナ諸島に関して、「日本皆殺しを狙ふ米鬼を断乎滅せ！ 勝たざれば平和なし 帝都は近き将来に第一線」（『読売報知』昭和 19 年 8 月 8 日）など。硫黄島に関して、「比島に敵廿万釘付け 硫黄島血の奮戦 全軍特攻、天機捉へん（陸相戦況報告）」（『朝日新聞』昭和 20 年 3 月 12 日）など。沖縄本島に関して、「一人まで戦はん “国民総出動” 近く決定（小磯首相放送）」（『読売報知』昭和 20 年 3 月 22 日）など。

<sup>147</sup> 徳富蘇峰「一億鉄石心を發揮せよ」（『毎日新聞』昭和 19 年 6 月 21 日）。

<sup>148</sup> 前掲、「比島に敵廿万釘付け 硫黄島血の奮戦 全軍特攻、天機捉へん」。

<sup>149</sup> 前掲、「一人まで戦はん “国民総出動” 近く決定」。

こうした比喩を用いることの意義として、敵軍が目前まで迫っていることを国民に印象的に認識させ、緊張感を高めることが考えられる。同時に、被侵攻地域を対馬・壱岐になぞらえることは、「本土」における「決戦」と「勝利」を想定していた。つまり、元寇を持ち出すことによって、国民に「本土決戦」の緊張感を与えながら、勝利の「希望」も演出しているのである<sup>150</sup>。

以上のように、大東亜戦争後期において、政府やメディアは、盛んに国民に対して「元寇当時の日本を想起せよ」<sup>151</sup>と訴えるようになっていた。

しかしながら、米軍による本土空襲が激しさを増し、「本土決戦」がいよいよ現実味を帯びてきた昭和20年6月に、『読売報知』は「歴史に拘泥するな」という社説を掲載した<sup>152</sup>。ここでは、もはや元寇の想起が禁止されている。元寇と大東亜戦争の差異が強調され、「歴史によりかゝって一喜一憂すべき時は永遠に過ぎ去った」と断言された。確かに、昭和19年以降の大東亜戦争の戦況は、元寇の歴史に極めて類似していた。しかし、時代も地理関係も全く異なる660年以上前の歴史にすぎることがあまりにも現実離れしていることを、終戦の直前になってメディアはようやく認めたのである。一方で、同月末に鈴木貫太郎内閣の発表した「内閣告諭」では、依然として「元寇以来の国難」という言い回しが継続されている<sup>153</sup>。つまり、政府は、元寇という「勝利」の歴史を前面に打ち出すことによって国民を鼓舞する手法から、終戦を迎えるまで脱却できなかつたのである。

以上のように、大東亜戦争の勃発を受けてアメリカを対象とする「元寇」論が活発に行われる中で、米軍のマーシャル諸島上陸のような「本土」への侵攻作戦は、元寇における対馬・壱岐の戦いに重ねられた。元寇の比喩には、国民の危機意識を保つとともに、厭戦気分を解消する効果も期待されていたと考えられる。

## 第二節 大東亜戦争下における「元寇」運動

本節では、大東亜戦争下の「元寇」運動、すなわち元寇に関する国民運動や文化について考察する。ただし、この時期の「元寇」運動は、主として政府主導で行われているため、そのプロパガンダを含めて考察する。

元寇を用いたプロパガンダの一つに、昭和18年頃から使用された「一億時宗」という標語がある。このスローガンは、全国民が北條時宗のように毅然とした精神をもって敵に当たることを求めている。例えば、陸軍省は「一億すべて戦闘配置について、来らば来れで一億時宗の決意を以て、寄らば斬らんの構へで敵を徹底的に撃滅し、以て光輝ある神州日本を守らなければならない」と主張している<sup>154</sup>。その他、時宗にちなんだスローガンとして、戦争末期に用いられた「莫煩惱（莫妄想）」や「慕直進前（慕進）」がある<sup>155</sup>。これらは、時宗が元寇を迎えるにあたって、禅宗の師である無学祖元から与えられた言葉であるが、大東亜戦争においては国民の精神を戦争遂行へ傾けるために用いられた。

<sup>150</sup> 玉井清『写真週報』に見る英米観とその変容（玉井清編『戦時日本の国民意識 国策グラフ誌『写真週報』とその時代』（慶應義塾大学出版会、平成20年））。元寇の比喩の意義が端的にわかる記事として、「勝ち抜け本土決戦 洋上撃滅に満を持す 敵来らば“元寇”の再現」（『読売報知』昭和20年7月27日）。

<sup>151</sup> 「映画『かくて神風は吹く』 製作開始（広告）」（『朝日新聞』昭和19年2月22日）。

<sup>152</sup> 「歴史に拘泥するな（社説）」（『読売報知』昭和20年6月7日）。

<sup>153</sup> 「元寇以来の国難来 死生一如に徹し 一切を戦勝一途に 内閣告諭 首相、一億を鼓舞」（『読売報知』昭和20年6月27日）。

<sup>154</sup> 「断乎と撃たん敵の反攻」（『写真週報』第296号〈情報局、昭和18年〉）。

<sup>155</sup> 「慕直進前」の真姿こゝに在り 炎天に黙々歛とる 戦ふ“莫煩惱”の姿 農魂井不滅・輝く民族精神」（『読売報知』昭和20年8月12日）など。

また、昭和 19 年以降に頻用された「米寇」という言い回しも特徴的である<sup>156</sup>。「米寇」という言葉には、元寇と並列的に捉えようとする意図があると考えられるが、「寇」という漢字が「敵軍による侵攻」という意味を持つことから、日本が守勢に回った時期から用いられるようになったことにも合点が行く。さらに、しばしば「米寇撃滅」や「獐悪兇暴な米寇」といった表現で使用されており、アメリカに対する「敵愾心」や「憎悪」を込めた言い回しであったことが推察される<sup>157</sup>。

元寇に関連する名称を戦艦や戦闘機などに付けることも一般的であった。例えば、昭和 16 年に接収された米軍の戦艦「ウェーク」は「多多良」と改名された。これは、元寇において主な合戦場となった「多々良浜」にあやかっただけのものである<sup>158</sup>。また、「神風特別攻撃隊」の一部隊に「時宗隊」という名称が付けられた例もある。ただし、後述するように、「神風特別攻撃隊」それ自体の命名に関しては、元寇は直接関係していない。

この時期、ラジオでは、政府関係者や軍人、識者によって「元寇」や「神風」に関する講演が活発に行われており、自由主義者のジャーナリストである清澤冽をして「近頃の講演に北條時宗が出ざることなし」と言わしめている<sup>159</sup>。こうしたラジオ講演の目的には、先述した国民の緊張感の維持と厭戦気分の緩和があったと考えられる。

この時期の文化としては、先述した琵琶の楽曲「北條時宗」が昭和 20 年になっても継続してラジオで放送されている<sup>160</sup>。元寇に関連する楽曲としては、北原白秋作詞の長唄「元寇」（コロムビアレコード、昭和 17 年）の広告が新聞紙上に多く掲載されているほか、支那事変以来再流行していた軍歌「元寇」の人气がさらに高まったようである<sup>161</sup>。

また、戦時下には元寇を題材とした演劇や映画も公演・公開されているが、この時期の作品は、政府や軍部の強い影響下に置かれていた。例えば、演劇「北條時宗」（前進座、昭和 19 年）は、陸軍記念日の記念作品として制作されている<sup>162</sup>。ただし、劇中には、プロパガンダらしきものは見当たらず<sup>163</sup>、陸軍記念日を上演の方便として利用したとも考えられる。一方で、映画「かくて神風は吹く」（大映、昭和 19 年）は、政府のプロパガンダ映画に相違なく、情報局による企画、陸軍・海軍各省の後援によって制作されている<sup>164</sup>。政府は、元寇における「神風」を活用するにあたって、国民の厭戦気分の緩和、戦意昂揚を目的としつつ、国民が「神頼み」に陥ることを危惧していた。そこで、孝明天

<sup>156</sup> 前掲、玉井清『『写真週報』に見る英米観とその変容』にこの指摘がある。「米寇」の語は昭和 17 年の時点で既に使用されているが、この時期は元寇の単なる対比として用いられているに過ぎない（早川成治〈海軍中佐〉「元寇と米寇」〈『経国』第 9 巻第 2 号、経国社、昭和 17 年〉）。

<sup>157</sup> 竹下文隆『われらの闘魂』（帝都出版、昭和 19 年）、「いでや米寇撃滅へ 元寇撃滅記念碑と油画にしのお熱血物語」（『週刊少国民』第 3 巻第 34 号〈朝日新聞社、昭和 19 年〉）など。また、全く元寇に言及せずに「米寇」の語が独立して用いられることもあった（高橋三吉〈海軍大将〉「米寇撃滅」〈『実業之日本』第 47 巻第 15 号、実業之日本社、昭和 19 年〉）。

<sup>158</sup> 「降伏米艦帝国艦籍に編入 その名も“多多良” 元寇役・戦勝縁りの地名を冠す」（『読売新聞』昭和 16 年 12 月 16 日夕刊）。

<sup>159</sup> 前掲、清澤冽『暗黒日記』昭和 19 年 3 月 10 日付。

<sup>160</sup> 「北條時宗」（『読売報知』昭和 20 年 2 月 4 日）。

<sup>161</sup> 「長唄 元寇（広告）」（『朝日新聞』昭和 17 年 11 月 25 日夕刊）など。前掲、鷺尾雨工『英雄時宗続篇 元寇』。

<sup>162</sup> 「前進座 北條時宗（広告）」（『朝日新聞』昭和 19 年 2 月 24 日夕刊）など。

<sup>163</sup> 「北條時宗 四幕七場」（『アサヒグラフ』第 1062 号〈朝日新聞社、昭和 19 年〉）。

<sup>164</sup> 前掲、「映画『かくて神風は吹く』 製作開始（広告）」など。国策グラフ誌である『写真週報』は、この映画を「国民の必見」と宣伝した（「国民映画 かくて神風は吹く」〈『写真週報』第 346 号、情報局、昭和 19 年〉）。戦後、この映画は、「効果的にその宣伝の使命を果たすことができた数少ない歴史映画のひとつ」と評価された（ピーター・B・ハーイ『帝国の銀幕 十五年戦争と日本映画』〈名古屋大学出版会、平成 7 年〉）。

皇の御製とされる「人毎に力のかぎり尽しての 後こそ吹かめ伊勢の神風」という和歌を映画に挿入している。この和歌は、「人事」を尽くしてこそ「神風」が吹くことを示唆しており、政府の懸念を払拭することが期待され、新聞紙上の宣伝文句に用いられたり、実際に作中で語られたりしている。さらに、この時期の映画としては、支那事変中に公開された「蒙古襲来 敵国降伏」(松竹)が再上映されるなど、元寇が戦意昂揚や戦争協力のためのプロパガンダに活用されていた<sup>165</sup>。

次に、戦時下の国民運動であるが、こちらも政府主導のものが多く見られる。例えば、国民に対して元寇当時にならった神社参拝が要請されている<sup>166</sup>。また、元寇にゆかりのある福岡県の管崎宮において行われた「英米撃滅」の祈願祭では、東條首相の祝辞が述べられた<sup>167</sup>。その他、元首相らによる「時宗神社」創建運動も行われている<sup>168</sup>。元寇当時の禁酒令を参考にした「禁酒禁煙運動」の実施(昭和19年)や、九州における「元寇記念伏敵週間」の設定(昭和20年)など、政府の関与が確認できない運動もあるが、いずれにせよ、戦争への協力という性格が強いものであった<sup>169</sup>。

以上のように、政府や軍部は、国民が共有する元寇の歴史を有効に活用して、戦時プロパガンダを普及させていった。

### 第三節 大東亜戦争下における「元寇」関連人物の評価と「神風」意識

本節では、大東亜戦争下で著された啓蒙書等における「元寇」関連人物及び「神風」の評価を明らかにし、元寇において重視された論点や「神風」に対する認識を分析することで前節までの議論を補足する。

まずは、元寇に関係する人物の評価について明らかにする。第一に、北條時宗の評価は、明治期以来の肯定的な評価が継続している。具体的には、「元」との開戦を決意したことや優れた戦争指導・国民指導、そして皇室の尊重などが評価されている<sup>170</sup>。また、戦時下においても時宗を主題とする書籍は出版されており、代表的なものとして歴史学者の關靖による『史話北條時宗』(昭和18年)がある<sup>171</sup>。その中の「時宗は正にその国難を救はんがために天から、わが皇国に授けられた大偉人であつたともいへよう」という一文は、「敗戦前の時宗観の帰結」とされることがある<sup>172</sup>。つまり、近代日本において、時宗は元寇に勝利をもたらした「英雄」として捉えられていたのである。確かに、戦争中には、時宗を礼賛することは「英雄崇拜」であり「皇道、臣道」に反しているとする極端な主張も見られた<sup>173</sup>。しかしながら、「英雄」「偉人」としての時宗に対する国民の期待や信頼は揺るぎなかったようであり、終戦まで国民の拠り所となり、前述のように政府のプロパガンダにも利用されたのであ

<sup>165</sup> 「敵国降伏 蒙古襲来(広告)」(『読売報知』昭和18年2月17日)など。

<sup>166</sup> 谷萩那華雄(陸軍少将)「米英撃ちてし止まむ 挙国必死の決戦」(『朝日新聞』昭和18年3月11日)、「元寇の故事に倣へ 国民一斉に所在の神社に参拝」(『読売報知』昭和19年10月24日)、倉野憲司「五十鈴川に禊祓せよ」(『朝日新聞』昭和20年1月22日)など。

<sup>167</sup> 「敵国降伏祈願祭」(『読売新聞』昭和17年1月16日夕刊)、「“神風”の旧地に厳かな“米英撃滅”」(『読売報知』昭和17年12月9日)など。

<sup>168</sup> 「鎌倉に時宗神社建設」(『読売新聞』昭和17年5月27日夕刊)。

<sup>169</sup> 「勝つ日まで禁酒禁煙」(『読売報知』昭和19年4月11日)。「“先山”の負けじ魂に 敵伏滅へ沸る熱情 元寇記念日迎へ 全九州の決意固し」(『読売報知』昭和20年8月8日)。

<sup>170</sup> 戦争指導・国民指導について、前掲、關靖『国難と北條時宗』など。朝廷に勅裁を仰いだことについて、井上一次(陸軍中将)『青少年の日本戦史』(泰東書院、昭和18年)など。

<sup>171</sup> 關靖『史話北條時宗』(朝日新聞社、昭和18年)。

<sup>172</sup> 前掲、川添昭二『北條時宗』。

<sup>173</sup> 松原致遠『国難の示す史的意義』(日本教学研究会、昭和19年)。

った。

第二に、元寇の戦闘に参加した武将についての評価であるが、明治期以来、引き続いてその奮戦ぶりが賞賛されている<sup>174</sup>。また、戦時下に特徴的な論調として次のようなものがある。伊予水軍の河野通有は、元寇において海上戦で活躍したことから、大東亜戦争における海軍に例えられた<sup>175</sup>。さらに、『少年倶楽部』（昭和 20 年）には、兄が弟に「おれたちは、昭和の河野通有になるんだぞ」と語りかける口絵が見られ、河野のように敵艦に斬り込んで行く勇敢さが少年に求められたことを示している<sup>176</sup>。対馬の宗助國、壱岐の平景隆については、昭和 18 年以降、アッツ島やマーシャル諸島などにおける戦闘に絡めて論じられることが多くなり、啓蒙書においても宗助國の戦死に「玉砕」という表現が用いられるようになった<sup>177</sup>。また、昭和 19 年から終戦にかけて、84 歳の少佐資能（太宰少佐）や 14 歳の河野通忠（河野通有の嫡男）が出征した逸話が登場する<sup>178</sup>。こうした老幼の武将の活躍を紹介することは、本土決戦を睨み少年少女や高齢者の戦争動員を図った国民義勇隊の編成に向けた布石とも考えられる。

第三に、龜山上皇については、祈禱の事実を適示するものの他に、当時の国民が上皇の「御稜威」の下に一丸となったという構図が打ち出されることもあったが<sup>179</sup>、上皇を殊更に礼賛するような論調は見られなかった。

第四に、「元」の皇帝・クビライは、この時期も「征服欲」の持ち主として否定的に描かれている。戦時下には、こうした特徴から、アメリカのフランクリン・ルーズベルト大統領になぞらえるものが多く見られる。大統領を「元主忽必烈以上の暗愚」や「米国製忽必烈」と表現するものがその典型であった<sup>180</sup>。また、元軍の対馬・壱岐における残虐行為は相変わらず描かれており、「元虜はかつて北より来た、米鬼今南から来るの相違はあるがその残酷性に何の変りがあるらう」という主張のように、米軍がアッツ島などの占領地域で行っていると宣伝された残虐行為に重ねられている<sup>181</sup>。

第五に、元寇当時の国民については、大東亜戦争における「銃後」の協力という観点から論じられることが多い。まず、「老人寡婦」の逸話、つまり井芹秀重や眞阿尼の「出征美談」は、ほとんど必ず紹介されるようになり、しばしば元寇当時の国民に比して現代の国民は努力が足りないという主張が展開された<sup>182</sup>。その他、宏覚禅師の愛国心や老若男女の国民の協力が殊更に強調されるようになった

<sup>174</sup> 平野直『神風 元寇物語』（学習社、昭和 17 年）など。

<sup>175</sup> 「河野通有公奮戦之図 八木画伯が献納」（『読売報知』昭和 18 年 3 月 12 日夕刊）。

<sup>176</sup> 松野一夫画「元寇の防塁に立つ」（『少年倶楽部』第 32 巻第 1 号〈大日本雄弁会講談社、昭和 20 年〉）。

<sup>177</sup> 前掲、竹下文隆『われらの闘魂』など。

<sup>178</sup> 高須芳次郎『少国民の国体読本』（フタバ書院成光館、昭和 18 年）、前掲、「日本皆殺しを狙ふ米鬼を断乎滅せ！ 勝たざれば平和なし 帝都は近き将来に第一線」、「元寇の役を想う（社説）」（『朝日新聞』昭和 20 年 2 月 26 日）など。

<sup>179</sup> 前掲、峯岸米造『輝く皇国史』など。

<sup>180</sup> 引用はそれぞれ、前掲、早川成治「元寇と米寇」、前掲、竹下文隆『われらの闘魂』。その他、前掲、前川晃一『第二の元寇』、中村孝也「先人に続け 想へ元寇、維新の教訓」（『朝日新聞』昭和 19 年 2 月 2 日）に同様の比喩がある。

<sup>181</sup> 關靖「一億・時宗の心 国土を護り遂げよ」（『朝日新聞』昭和 19 年 7 月 19 日）。その他、前掲、「日本皆殺しを狙ふ米鬼を断乎滅せ！ 勝たざれば平和なし 帝都は近き将来に第一線」、前掲、「いでや米寇撃滅へ 元寇撃滅記念碑と油画にしのお熱血物語」、渡邊幾治郎「煩悩する莫れ 「元寇」当時の国民の決意」（『読売報知』昭和 19 年 2 月 8 日）など。

<sup>182</sup> 橋本實『少年武士道史』（東京郁文社、昭和 18 年）、菊池寛『太宰府と菅公』（地平社、昭和 18 年）など。国民に苦言を呈するものとしては、前掲、中野八十八『憂国の志士』、前掲、「日本皆殺しを狙ふ米鬼を断乎滅せ！ 勝たざれば平和なし 帝都は近き将来に第一線」などがある。



次に、大東亜戦争下の「神風」意識について考察する。啓蒙書においては、この時期にも、元寇で吹いた「風」について「颶風」や「暴風雨」などと表記することが一般的であり、「神風」という言い回しは、一部の青少年向けの書籍などで用いられているに過ぎない<sup>184</sup>。一方で、国史の国定教科書においては、昭和9年以来「神風」という表記が使われているほか、元寇に関する記述の「表題」についても、従来の「北條時宗」から「神風」に変更されている<sup>185</sup>。こうした表題変更には、人物から歴史を見る「人物中心主義」を脱して「歴史の流れ」を重視しようとする意図が見られ、前述した「英雄崇拜」批判と関連しているものと思われる。

元寇における「神風」の評価は、この時期においても元寇の勝因を専ら「神風」に帰する礼賛論は少なく、国民の一般的な認識に反駁するように、「神風」が吹かなくても他の要因によって勝利を得られたとするものが多く見られる<sup>186</sup>。こうした議論に加えて大東亜戦争下で急増した論調が、前節でも触れた「人事」「人力」を尽くしてこそ「神風」が吹くという主張である<sup>187</sup>。ここでは、「神風」が全面的には否定されていないことに注目すべきである。「神風」は「人力」を尽くせば吹くものであり、そこから生まれる「希望」が戦時においては必要だったのである。

同時に、国民が「神頼み」に陥らないように「人事」を尽くすことの重要性が説かれた。こうした主張を端的に示すものが、先述した和歌「人毎に力のかぎり尽しての 後こそ吹かめ伊勢の神風」であり、多くの啓蒙書に引用されている<sup>188</sup>。

政府や軍部としても、緊張感を持たせながら国民を鼓舞する「神風」には強い関心を持っており、プロパガンダ映画の題材に採用するなど最大限に利用している<sup>189</sup>。また、単純に事物に「神風」を冠することも活発に行われており、商工省が命名した「神風銅山」や、後述の「神風特別攻撃隊」などがある<sup>190</sup>。ただし、政府や軍部による「神風」の利用については、国民の鼓舞という政策的な目的以外に、自らも「神風」に淡い期待を寄せていた可能性も否定できない<sup>191</sup>。

「神風」という言葉の用法としては、従来通り、戦場に吹く有利な風や日本を危機から救う可能性がある事物に対して用いられている。具体的には、B-29による爆撃を阻止した悪天候を「神風」と称

<sup>183</sup> 宏覚禅師について、坂ノ上信夫『日本海防史』（泰光堂、昭和17年）、前掲、井上一次『青少年の日本戦史』、前掲、中野八十八『憂国の志士』など。その他の国民について、中柴末純（陸軍少尉）「撃ちてし止まむ（三） 元軍へ「おみつ」の攻撃精神 弘安の役、神国挙つての必勝魂を想へ」（『読売報知』昭和18年2月28日夕刊）、前掲、松原致遠『国難の示す史的意義』など。

<sup>184</sup> 前掲、高須芳次郎『少国民の国体読本』など。

<sup>185</sup> 前掲、滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ 明治期から現代まで』。

<sup>186</sup> 前掲、平野直『神風 元寇物語』、酒井鎬次『戦争類型史論』（改造社、昭和18年）など。

<sup>187</sup> 植村茂夫『海軍魂 日本海軍はなぜ強いのか』（東水社、昭和17年）、前掲、前川晃一『第二の元寇』、「無努力に神風吹かず 身を挺し神州の護持へ」（『朝日新聞』昭和19年6月29日）、前掲、「元寇の役を想う（社説）」など。

<sup>188</sup> 加藤咄堂『亜細亜を睨む時宗と秀吉』（潮文閣、昭和17年）、前掲、山上八郎『戦争と日本民族』、前掲、鷺尾雨工『英雄時宗続篇 元寇』など。

<sup>189</sup> 前掲、谷萩那華雄「米英撃ちてし止まむ 挙国必死の決戦」、「攻勢移転の秋 原動力は銃後の生産（栗原大佐放送）」（『朝日新聞』昭和19年5月27日）。

<sup>190</sup> 「銅山にも“神風” 新鉱を続々と発掘」（『朝日新聞』昭和18年8月20日）など。その他、情報局などが後援した「愛国いろはかるた」（日本少国民文化協会、昭和18年）の「い」の札に「伊勢の神風敵国降伏」が採用された事例がある。

<sup>191</sup> 清澤冽は、「軍部はまだ、最後に神風が吹き、戦争が大勝利を以て終ることを信じているそうだ」と指摘した（前掲、清澤冽『暗黒日記』昭和19年8月25日付）。その他、「強力な戦争指導 徹底せる一体化要望 必勝への道」（『朝日新聞』昭和20年1月2日）などの史料からも「期待」が読み取れる。

したり、新兵器の開発を「科学的神風」と呼称したりするものが見られた<sup>192</sup>

最後に、近代日本における「神風」意識を分析する際に注意すべきことがある。それは、「神風」という言葉の指し示す意味が、必ずしも元寇における「風」にはとどまらないことである。確かに、「元寇」という言葉を聞くと、近代日本の多くの国民は「神風」を連想した<sup>193</sup>。しかしながら、逆に「神風」という言葉から、「元寇」を想起するとは限らなかった。つまり、「神風」とは、神話以来、日本に常に存在している抽象的な概念であり、元寇における「風」はこれが具現化した一例に過ぎないという認識だったのである<sup>194</sup>。おそらく、その代表的な例が大東亜戦争中に誕生した「神風特別攻撃隊（神風特攻隊）」であろう。神風特攻隊は、昭和19年に海軍により編成された航空部隊である。その名称は、猪口力平参謀（海軍大佐）と玉井浅一副長（海軍中佐）の相談によって決定されたが、元寇の「神風」との間に直接的な関係性は見られない<sup>195</sup>。こうした事実を裏付けるように、メディアにおいて神風特攻隊の戦果報道と元寇を同時に論じているものは、管見の限り見当たらなかった。むしろ、特攻隊の「守護神」は楠木正成とされており、特攻隊に楠木の「七生報国」の精神を見出しているものが圧倒的に多く見られたのである<sup>196</sup>。

## おわりに

本論文では、近代日本において、「元寇」という歴史的事実がいかなる状況で想起され、どのように語られ、利用されたのかを明らかにした。

元寇は、日本に來襲した「元」という「軍事大国」を、「本土」において迎撃し、「勝利」した歴史であった。こうした史実を背景として、近代日本において元寇は、対外的な危機との関係で語られた。

明治期には、元寇の歴史は、清国やロシアという「軍事大国」の脅威との関係で論じられた。そして、「護国精神」の涵養を目指して行われた国民主導の「元寇」運動は、日清戦争や日露戦争に密接に関連しながら、広く国民を巻き込んで展開されたのであった。

また、大正期から昭和戦前期にかけては、アメリカや社会主義思想（及びソ連）の脅威を喧伝するために元寇が利用された。しかし、アメリカやソ連との間に戦争状態が発生したわけではなく、また、社会主義思想は軍事的な脅威ではなかったことから、国民の関心は必ずしも高まらなかった。さらに、満州事変や支那事変の勃発によっても、「本土」の国民に危機が切迫したわけではなく、「元寇」論は低調となっていた。

しかし、アメリカという「軍事大国」との間に大東亜戦争が勃発すると、同国を対象とする「元寇」

---

<sup>192</sup> 悪天候について、「九州に“神風” 敵空襲失敗認む」（『朝日新聞』昭和19年11月14日）。新兵器について、「鉄箒 神風と技術者」（『朝日新聞』昭和19年11月23日）など。

<sup>193</sup> 竹内榮喜（陸軍少将）「元寇の陸戦」（雄山閣編輯局編『日本陸軍史』〈雄山閣、昭和10年〉）。

<sup>194</sup> 前掲、中村孝也「先人に続け 想へ元寇、維新の教訓」、前掲、倉野憲司「五十鈴川に禊祓せよ」、瀧本豊之輔「皇国と神異 元寇六百五十年記念に際し英霊を弔ふとして」（前掲、『國學院雑誌』第443号）などの史料の解釈による。前掲、関幸彦『神風の武士像 蒙古合戦の真実』にも同様の指摘がある。

<sup>195</sup> 猪口力平、中島正『神風特別攻撃隊の記録』（雪華社、昭和38年）、金子敏夫『神風特攻の記録』（光人社、平成13年）、栗原俊雄『特攻 戦争と日本人』（中央公論新社、平成27年）。

<sup>196</sup> 「尽忠精神は死せず 続く千万の楠公 “壮行の子”に餞け 菅原航空総監の辞」（『朝日新聞』昭和19年11月14日）、「讃えよ神風特別攻撃隊の遺烈 壮烈・体当りに甦る“七生報国”の尽忠 いまに生く大楠公精神 櫻井少将談」（『読売報知』昭和19年10月29日）など。先行研究として、デニス・ウォーナー、ペギー・ウォーナー『ドキュメント 神風（上）』（時事通信社、昭和57年）がある。

論が活発に行われた。そして、米軍が「本土」へと迫ったマーシャル諸島上陸以降は、政府・軍部によって積極的に元寇の歴史が利用された。それは、「本土」における決戦に向けた国民の緊張感の維持と「勝利」の記憶による厭戦気分の緩和のために行われたのであった。

このように、鎌倉時代の元寇の歴史は、時代を超えて近代日本において想起され、国民を啓蒙する手段として有効に活用されたのであった。

さらに、本論文では、近代日本における元寇の位置付けを多角的に考察するため、元寇を解説する啓蒙書等における関連人物や「神風」に関する記述を量的に分析した。

北條時宗を始めとする「元寇」関連人物の評価は、現代のそれと異なるばかりでなく、「近代」の中においても変化していた。具体的には、時期によって紹介頻度や評価の視点などに差異が認められ、それらは「元寇」論や「元寇」運動と同様に、時代の要請に応じたものとなっていた。

また、元寇を語る際には欠かせない「神風」についても考察を加えた。啓蒙書等における「神風」の表記や評価の特徴を明らかにするとともに、メディア等に表れた「神風」という言葉の用法を分析することによって、近代日本の国民が共有していた元寇に限定されない「神風」の概念が存在することを指摘した。